



RIETI Policy Discussion Paper Series 17-P-035

## 汎用AI時代を福音に変える「美意識革命」のすすめ

藤 和彦  
経済産業研究所



Research Institute of Economy, Trade & Industry, IAA

独立行政法人経済産業研究所

<http://www.rieti.go.jp/jp/>

## 汎用AI時代を福音に変える「美意識革命」のすすめ\*

藤 和彦 (経済産業研究所)

## 要 旨

「30年後に汎用AI (人工知能) の実用化により人間の労働の大半が失われる」との懸念が高まりつつある。18世紀後半の産業革命で多くの雇用が失われ雇用状況が改善したのは30年後以降であり、汎用AI時代到来でも同様の事態が起きる可能性があるからだ。このため需要の大幅減少を防ぐために「ベーシックインカムを導入すべき」との声が上がっているが、市場での交換 (有用性) を前提としている経済社会のあり方 (「働かざる者食うべからず」という価値観) が根強く、日本での導入は非常に困難である。

ケインズは1930年「100年後の人間は1日の労働時間が3時間となり、高潔で上手な一日の過ごし方を教示する人を尊敬するようになる」と汎用AI時代を見越したかのような予言を行ったが、安定的な社会を築く方策には触れていない。

ドラッカーは1969年「2025年頃までに『知識社会』が実現し、『知識』が資本となる」と主張したが、汎用AI時代到来後の「知識」はコモディティ化するだろう。

社会に先駆けてAIの挑戦を受けた将棋界の羽生善治は「AIにない人間の特性を『美意識』だ」と指摘するが、汎用AI時代ではAIが創造できない身体 (生命) 性に立脚した「美」が希少性を有するようになるのではないだろうか。

筆者は脳科学などの知見 (美の判断を報酬系部位が行う、美は「正義」の感情を惹起するなど) や最近の若者の動向 (地下アイドルの隆盛、1億総オタク化、インスタ映えなど)、「美意識」が日本にとって社会秩序の要だったことにかんがみ、今後「知識社会」が「美意識社会」に変化していくと考えるに至ったが、「知識」が社会に普及するにつれてその性質を変えたように、「美」のあり方も変わっていかねばならない。

筆者が考える美意識社会における「美」のあり方は以下のとおりである。

①個別作品 (モノ) よりも人々の行動 (コト) の中に美を見出す②美の効用は身体動作を通じた生命エネルギーの活性化である③美で社会を活性化するためには日々の精進が欠かせない④美の創造は天賦の才よりも個人々の努力が決め手となる (美的創造の平等性) ⑤「自らの生理的な『快』を求めながら他者への配慮をする」という日本本来の美意識 (身体感覚に敏感) を重視する⑥動的な美 (特に歌と踊り) が有する社会秩序形成機能を活用する⑦美意識は有効な資源であるとの発想に立ち、潜在的に市場性を有する美の活動を拡大させる方策を講じる (特に美的活動に目覚め始めた若者の動きを支援する)

「美意識社会」の実現には市場を活用することが基本だが、最初の段階で「美」の潜在的な需要を掘り起こすため、「美意識社会」だった江戸時代の庶民の暮らしぶりを参考に「互いに美の作り手と受け手となる仕組み (例えばコミュニティ・アート組合)」を構築した上で、地方自治体などが地域通貨を発行するなどの支援を講ずることが有効だろう。また各人が美意識の基盤となる「趣味力」を涵養することや「美意識」を普及・向上に資する活動に対して社会的効用 (外部経済性) の観点から公的支援を行うことが必要である。美意識社会を構築すれば、ベーシックインカムを導入しなくてもマクロ経済上のバランスを保つことができるばかりか、美の創造を通じて「人間性」を回復させることでこれまで以上に幸せな生活を実現することができるのではないだろうか。

キーワード: AI、今後の労働のあり方、美意識、若者の動向、江戸時代の芸能事情、仮想通貨

JEL classification : J10, N35, O30, O35, Z11

RIETI ポリシー・ディスカッション・ペーパーは、RIETI の研究に関連して作成され、政策をめぐる議論にタイムリーに貢献することを目的としています。論文に述べられている見解は執筆者個人の責任で発表するものであり、所属する組織及び (独) 経済産業研究所としての見解を示すものではありません。

\* 本稿は、独立行政法人経済産業研究所における研究成果の一部である。

## 1. 今後導入が飛躍的に進む可能性がある人工知能

「21世紀は間違いなく『人工知能』の世紀になる」(注1)

2016年の新書大賞に輝いた「人工知能と経済の未来」の著者である井上智洋はこのように主張する。「人工知能(以下「AI」)」とはコンピュータに知的な作業を行わせる技術の総称(注2)だが、今後私たちの生活に大きな影響を及ぼすことになるだろう。

例えばトヨタやホンダなどは東京オリンピックが開催される2020年を目途に人工知能が人間に代わって運転する「自動運転車」の実現を目指している(注3)。2025年頃にはコンピュータが意味を正確に理解して、外国語の翻訳や通訳が自動化されると予想されている(注4)。実用化されている人工知能は特化された課題のみを処理するもの(特化型人工知能(以下「特化型AI」))だが、2030年頃には人間のように様々な知的作業をこなすことができる「汎用型人工知能(以下「汎用AI」)」の開発の目途が立つと言われている(注5)。

AIブームを牽引しているディープラーニングの潜在能力は高いとされている。

人間を超えた囲碁ソフトAlphaGoはその後AlphaGoゼロに進化した。TPU(ディープラーニング専用プロセッサ)というハードを採用したことで、もはや人間がデータを用意しなくても学習能力を向上させている(注6)。

「ディープラーニングの潜在能力の限界はわかっていない」(注7)

こう指摘するのは「人工知能はどのようにして『名人』を超えたのか?」の著者山本一成だが、「言語であれなんでもあれなんとか画像と結びつけることができたら、一気にディープラーニングの得意な対象となる」(注8)「人工知能がある知的作業を少しでもできるようになってきたら人間の能力を上回るタイミングが目前に迫っている」(注9)「現在十分に学習したディープラーニングは学習の効果は転移でき、プログラムを書くプログラムは赤ちゃんレベルだがある程度成功し始めている」(注10)と指摘する。

山本はさらに「人工知能の知性の獲得は複数のディープラーニングをつなげたディープラーニングを作って達成されるのではないか」(注11)と予測する。

井上も「今日の機械学習の技術はゲームのような限られた範囲である程度の汎用性を有するようになった。このことは外界から得た情報に基づいて幾つもの思考パターンを作り出すことができることを意味する。こういった思考パターンはAIが自然に成長することで得られた知性であり、人間の設計を半ば超えた知性だ」(注12)と指摘する。

AIは意識を持てるかどうか議論になっているが、「強いAI・弱いAI」の著者である鳥海不二夫は「マルチタスクをこなすためのOSは汎用AIの運用に必要なが、汎用性の有無と意識の有無は関係ない」(注13)と指摘している。意識を持たなくて汎用AIは構築することはでき、現在の技術の延長上でもAIが少なくとも人間並みの知性(マルチタスクをこなす能力)を持つことは原理的に不可能ではないようだ。

汎用AIは特化型AIに比べて格段のコスト低下につながる(かつてのワープロ専用機がWindowsのワードに駆逐されたことを想起せよ)ことから、その導入拡大は今後飛躍的に進む可能性がある。

このような楽観的な予測を疑問視する声がある。「AIを支える半導体分野における『ムーアの法則』が2020年頃に限界を迎える」や「電力を猛烈に消費するビッグデータ時代の終焉する」などだが、現在のAIの主力ツールである機械学習の次世代ハードとして

有力視される量子コンピュータ（消費電力が現在のコンピューターの100分の1以下）の実用化に目途が立ちつつあるとされている（注14）。

しかし、時期はともかくとしても人間と同じような知的振る舞いをする汎用AIが実現し普及するようになれば、人間の労働の大半が汎用AIとそれを搭載したロボットなどに代替され、現在の経済システム全体が大きく変容することになる可能性がある。

（注1）井上智洋「人工知能と経済の未来 2030年雇用大崩壊」文藝春秋社、2016年、3頁

（注2）井上智洋前掲書、3頁

（注3）井上智洋前掲書、4頁

（注4）井上智洋前掲書、4頁

（注5）井上智洋前掲書、5頁

（注6）2017年12月10日付日本経済新聞

（注7）山本一成「人工知能はどのようにして「名人」を超えたのか？」ダイヤモンド社、2017年、88頁

（注8）山本一成前掲書、106頁

（注9）山本一成前掲書、119頁

（注10）山本一成前掲書、194頁

（注11）山本一成前掲書、183頁

（注12）井上智洋前掲書、310頁

（注13）鳥海不二夫「強いAI・弱いAI 研究者に聞く人工知能の実像」丸善出版、2017年、13頁

（注14）西森秀稔 大関真之「量子コンピュータが人工知能を加速する」日経BP社、2016年、2頁

## 2. 2030年雇用大崩壊

汎用AIが2045年にかなり普及していると予測する井上は、人間が汎用AIに負けない領域として①クリエイティブ系（創造性）②マネジメント系（経営・管理）③ホスピタリティ系（もてなし）を挙げている（注15）。①は小説を書く、新しい商品の企画を考えるといった仕事、②は工場・店舗の管理、会社の経営など、③は介護士、看護師、保育などの仕事である。井上が指摘する3つの領域に従事する現在の就業者数は約2000万人だが、当該分野でもある程度AIが人間を代替すると予想されるため、2045年の就業者数は現在の約半分（約1000万人、全人口の1割弱）になるとしている（注16）。

「仕事消滅 AIの時代を生き抜くために、今私たちにできること」の著者である鈴木貴博も「2045年以降、汎用AI搭載ロボットの価格が数百万円程度にまで下がったときには、人類の90%の仕事が失われることになる」と予測する（注17）。鈴木はデジタルカメラ（以下「デジカメ」）の例を挙げながら「新たな技術の誕生から破壊的イノベーションの脅威が現実になるまでの時間は20年程度、そして古い業界の最大手が消えていくのが30年後である」と指摘する（注18）。デジカメのケースでは1981年にソ

ニーがデジカメの元祖とも言うべき商品の試作品を発表した。1990年代に入った頃大手フィルムメーカーの役員は「あんなのおもちゃだよ」と高をくくっていたが、1995年にカシオが初のデジカメのヒット商品を発売すると爆発的に普及し、2012年には世界最大のフィルムメーカーだったイーストマンコダックが連邦破産法を申請した(注19)。2015年にディープラーニング分野でブレークスルーが生じた30年後にAIが既存産業にとって大きな脅威となるという訳である。

驚きべきは鈴木が「本当に心配すべきは肉体労働の仕事ではなく頭脳労働の仕事だ」(注20)と指摘していることである。鈴木は「2040年以降知的労働の大半はなくなり、残された仕事はロボットより優れた指先が必要な単純労働の仕事に絞られる」(注21)とした上で、「ロボット数の制約から解放される2055年頃には人間の仕事は完全になくなる」(注22)と悲観的な未来を提示する。

(注15) 井上智洋前掲書、160～161頁

(注16) 井上智洋前掲書、160～161頁

(注17) 鈴木貴博「仕事消滅 AIの時代を生き抜くために、いま私たちにできること」講談社、2017年、5頁

(注18) 鈴木貴博前掲書、59頁

(注19) 鈴木貴博前掲書、61頁

(注20) 鈴木貴博前掲書、91頁

(注21) 鈴木貴博前掲書、77頁

(注22) 鈴木貴博前掲書、90頁

### 3. 社会が大混乱するリスク

「技術革新は一時的に古い仕事を陳腐化させるが、やがて新しい仕事が登場して経済が以前よりも発展する」との論調が日本では多数派のようだが、鈴木は「過去の歴史において、新しい仕事が生まれて失業者たちを吸収するのは30年以上も後の出来事だった」として楽観論を戒めている(注23)。産業革命が始まった英国では1779年に最初のラッドライト運動と呼ばれる機械打ちこわし運動が起きている。機械の普及によって雇用を失うことを恐れた労働者がニットの製造機などを破壊する運動を激化させたことから、英国政府は機械の打ちこわしを行った者に対して死刑を適用する法律を制定した。これによりラッドライト運動は穏健な形に変化した。この運動が下火になるまでに40年かかった(注24)。産業革命から40年経ってようやく産業革命で導入された大規模な機械が新たな雇用を生むようになったからだが、新しい仕事に就けたのは次の世代の労働者であって、産業革命の波をもろに受けた世代は生涯失業したままだったというのが実態だった。

「人間さまお断り 人工知能時代の経済と労働の手引き」の著者であるジェリー・カプランも「18世紀後半から19世紀前半の産業革命により平均所得は劇的に増加したが、その変化に伴って人々は筆舌に尽くしがたい苦しみを味わった」(注25)と指摘する。

「現在の政策立案者たちは加速する技術革新という原因を過小評価している(注26)と批判するカプランは「近い将来、産業の自動化が進むと資本さえあれば人の労働力も頭脳

も不要となる」(注27)「米国の農業部門の雇用は2世紀をかけて毎年0.5%減少したが、この変化が今後20年で起きる。変化それ自体ではなく速度で問題である。今手を打っておかないと子孫は半世紀以上にわたって貧困と不平等に苦しむ」(注28)と警告を発している。

井上が指摘しているように汎用AIは「汎用テクノロジー(蒸気機関のように生活の様々な場面に使われて生活の質を上げる技術)」に該当する(注29)。汎用AIの導入により人間は賃金を得るための労働から解放されることになるが、収入を得られなくなった人々が生存に必要な財・サービスを購入できなくなる可能性がある(注30)。汎用AIだけではユートピアは実現できないのである。

アダム・スミスは「人は必ず労働によって生きなければならない、だから賃金は最低限食べていくに足るだけではなくてはならない」と主張したが、現在の私たちにとって仕事は単に生活原資を得るための手立てではなくアイデンティティの根源でもある。「労働は善きものであり、経済的に必要で倫理的に有益だ」とする価値観に基づき、仕事がかまくま回っていることが社会秩序の安定さに直結している。

「ポストキャピタリズム 資本主義後の世界」の著者であるポール・メイソンは「無料の情報と無料の機械の出現は新しい現象」(注31)であり「情報技術はあらゆることを可能にするが、今後成長に役立つかは不確かである」(注32)と指摘する。情報技術の分野では「新たな技術が出現すると旧技術が突然姿を消すという特徴」(注33)があり、「製品のコストがゼロで所有権が弱いという性質を持つ情報基盤の資本主義経済であるはずがない」(注34)と主張する。AI化の進展については「本当の危険は大量の失業ではなく、古い市場が使い尽くされると新しい市場を創造するという資本主義の250年間の傾向は完全に消耗したことだ」(注35)と主張する。

「デジタルエコノミーはいかにして道を誤るか 労働力余剰と人類の富」の著者であるライアン・エイヴェントも「ユートピア実現の最大の難関は生産力を上げる方法ではなく、生産の成果を均等に分配することだが、大デジタル化時代の繁栄を築くためには、働かない人々が食べていける制度を構築することが不可欠だ。だが合意に至るまでには苦しい政治的変化の時期をくぐり抜けることが不可避だろう」との見方を示す。かつての産業革命の場合は労働力が希少であったことから結果的に賃金労働者の立場は改善されたが、それでも欧州は既に産業経済の果実をめぐる100年以上に及ぶ激しい階級闘争を経験した(注36)。「労働力が希少でなくなれば仕事という形で生きる意味とアイデンティティを得られなくなった若者は過激思想に走らせる可能性があり、今後混乱が数十年にわたって続き、世界政治の構造に暴力さえ伴う劇的な変化をもたらす」(注37)とエイヴェントは将来への懸念を隠さない。エイヴェントが最も懸念するのが米国である。「国民の均質性が低いアメリカという大国は不平等で扇動家の煽りに翻弄されやすい大国となり、地政学的な外部圧力のもたらす緊張のおかげで再分配を行う共産的な共同体になる」(注38)からである。

(注23) 鈴木貴博前掲書、122頁

(注24) 鈴木貴博前掲書、124頁

(注25) ジェリー・カプラン「人間さまお断り 人工知能時代の経済と労働の手引き」

三省堂、2016年、27頁

(注26) ジェリー・カプラン前掲書、23頁

(注27) ジェリー・カプラン前掲書、21頁

(注28) ジェリー・カプラン前掲書、152頁

(注29) 井上智洋前掲書、152頁

(注30) 井上智洋前掲書、197頁

(注31) ポール・メイソン「ポストキャピタリズム 資本主義以後の世界」東洋経済新報社、2017年、292頁

(注32) ポール・メイソン前掲書、43頁

(注33) ポール・メイソン前掲書、65頁

(注34) ポール・メイソン前掲書、297頁

(注35) ポール・メイソン前掲書、297頁

(注36) ライアン・エイヴェント「デジタルエコノミーはいかにして道を誤るか 労働力余剰と人類の富」東洋経済新報社、2017年、22頁

(注37) ライアン・エイヴェント前掲書、14頁

(注38) ライアン・エイヴェント前掲書、17頁

(注39) ライアン・エイヴェント前掲書、319頁

#### 4. 経済成長以上に富の分配が重要なテーマに

井上は「2045年時点の経済はあらゆる産業で機械資本の限界生産力が低減しないことから潜在的成長率は向上するが、大量の技術的失業者が発生することにより需要が長期にわたり経済成長の制約になる懸念が生じている」（注40）と指摘する。鈴木も「今後は経済成長以上に富の分配が重要なテーマになる」（注41）と主張する。

このような事態を回避するため井上はベーシックインカム（以下「BI」）の導入を提案している。具体的には収入の水準にかかわらずに全ての人に無条件に毎月7万円のお金を給付するというもの（注42）だが、「AIが高度に発達し、働いて所得を得ることが当たり前ではない社会がやってくれば、恐らく、多くの人々がBIを導入した方が良いとの考えに至る」（注43）と井上は考えている。

井上と同様、極端な格差社会になり経済全体が失速することを恐れる鈴木は「すべてのAI・ロボットの利用権を国有化した上で、AI・ロボットの産業利用に対しては賃金を国が支払い、AI・ロボットに支払われた給料は国民に配分する」（注44）ことを提案する。ビル・ゲイツも同様の提案を行っている（AI・ロボットへの置き換え速度を抑え、人間に適している新たな職を作る財源としてロボットに対して税金をかける）（注45）が、AIやロボットを導入する産業界のインセンティブを大きく損ねてしまうことは明らかである。世界全体が統一して実施しなければ、抜け駆けした国だけが発展することになってしまう。

昨今AIの研究開発の動向や将来消えてしまう職業の分析はなされているものの、そもそも汎用AI時代が到来した後の経済社会のあり方について考えている人はあまりいないが、「どんなに居心地が良くても、社会に役に立ち給料がしっかりもらえる仕事に就きた

い」という人間の願望を満たすことができる新たなソーシャルデザインが今こそ求められている時代はない。

(注40) 井上智洋前掲書、184頁

(注41) 鈴木貴博前掲書、8頁

(注42) 井上智洋前掲書、224頁

(注43) 井上智洋前掲書、233頁

(注44) 鈴木貴博前掲書、148頁

(注45) 2017年4月9日付東洋経済オンライン

## 5. スピーナムランド改革の失敗

井上(BI)・鈴木(ロボットに賃金を支払う)両氏の提案はいずれも傾聴に値するが、「スピーナムランド改革の失敗」の二の舞を繰り返す懸念がある。

スピーナムランド改革とは、産業革命発生直後の1795年に英国・バークシャーのスピーナムランド教区で始まった新たな救貧法改革のことを指す(注46)が、この改革は同年に教区間の労働者の移動を禁ずる定住法が撤廃されたことを受けて、労働者への過度の悪影響を避けるために設けられた措置であった。

新しい法律によれば失業者ばかりか実際に働いている者も一定の賃金水準を受け取っていないければ、救貧税を原資としてその不足額を給付金の形で補助されることとなった(補助金の額は食料品の価格と家族の人数で算定)が、この制度は結果的に大失敗に終わった(1834年に廃止)。失敗の最も大きな要因は、働きのいかんにかかわらず一定賃金が保証されたために労働の質(労働の生産性)が低下し、独立心と自尊心を喪失した人々が給付金に頼って生計を立てる行動に走ってしまったことである。他方雇用主側も救貧税を元手とした給付金が支給されることを奇貨として賃金引き下げを断行するようになった。

救貧対象とならずに逆に税を負担する側に回った農村の中産階級からは貧困者に転落するものが相次ぎ、彼らも公的救済に頼る「寄生的大衆」と化していった。

救貧税給付金額が膨れ上がる一方で国全体の活力が損なわれてしまったことから、1832年の選挙法改正で権力を握った中産階級(救貧税を負担)は2年後に救貧法を改正しスピーナムランド改革を一掃した。

経済人類学者のカール・ポランニーは「結果的にこの措置が英国を革命から守った」と評価しているが、「労働意欲の低下と労働者の賃金下落」をもたらしたスピーナムランド改革の失敗により多くの国民は「生存権は死に至る病だ」と認識するようになったと言われている。スピーナムランド改革の導入とその廃止により、崩れつつあった地主の支配とその温情的な制度が終焉を迎えた。その後自由で労働市場を備えた(無慈悲な)近代資本主義が成立したが、労働者は価値ある環境(隣人・家族・農村的環境)から切り離され、社会において帰るべき場所を失ったとされている(スピーナムランド改革は実は成功だったとの指摘がある(注47))。

その後19世紀末から20世紀後半にかけて欧州諸国で貧富の格差拡大とそれに伴う様々な矛盾を緩和するため中央政府による福祉政策が始まり、第2次世界大戦後は共産主義

諸国との対抗から西側先進諸国の間で福祉国家政策が講じられた。しかし石油危機によりスタグフレーションに見舞われたことで英国や米国が主導する形で福祉国家政策が見直され、所得再分配の機能を抑制し経済競争を重視する政策が採用され、現在に至っている。

(注46) カール・ポラニー「大転換 市場社会の形成と崩壊」東洋経済新報社、2009年、134～178頁

(注47) ルトガー・ブレグマン「隷属なき道 AIとの競争に勝つベーシックインカムと一日三時間労働」文藝春秋社、2017年、91～92頁

## 6. 再分配が有効に機能するためには

ポラニーは「市場での交換」とともに「再配分」を社会統合の主要な手段と考えていたが、国民国家が再配分の主体となる近代以前は宗教がその役割を担っていた。

「経済を読み解くための宗教史」の著者である宇山卓栄は「宗教の本質は利害調整機能である」（注48）と主張する。経済が成長し発展する時代において経済格差は必然的に拡大し、貧しい者達の不満が増大する。格差の一定レベルを超えると貧困層の消費活動が滞って経済全体が回らなくなると、宗教が「神の前の平等」という主張の下で寄付・寄進などを活発化させ貧富の格差を解消し、これにより経済の均衡を取り戻してきた。

例えば「隣人を愛せ」というキリストの言葉はもとより、中世の欧州では行政機能や秩序維持の中心的役割を担っていたカトリック教会が、公共事業（教会の建設等）を推進して貿易の拡大による富の余剰を貧しい農村部までに行き渡らせていた（注49）。

殺生を厳しく禁じる仏教が、安心して商売に打ち込める環境を保証することに気付いた商人達が盛んに行ったお布施を元手にインドの統一王朝は民衆のすべてに富が行き渡るように配慮した。東南アジアのアンコール王朝でも寺院の建設という宗教的な動機が起爆剤となり経済を動かしたとされている（注50）。

イスラムという言葉はもともと「譲渡」という意味だが、ムハンマドが生を受けた7世紀のメッカは欧州とアジアの中継貿易で莫大な富を蓄積され、極端の格差が生まれていた。これに反発したムハンマドは貧富の格差を是正すべく610年「唯一神アッラーの前の平等」を主張する教えを説くようになり、富裕層に課されるザカート（喜捨）が貧困層に富を再配分した（注51）。

しかし再配分を機能たらしめていた宗教の影響力が大きく弱まった近代以降、再配分に代わって「市場での交換」が社会統合の主要な柱となっている。

20世紀の社会主義国家を駆動させていたのは人間の合理性への信頼であり、この信念は人間を超越した神に最終審判をゆだねる宗教の理念と相容れない。この社会主義から「働かざる者食うべからず」という信念が生まれたが、先進諸国の中では特に日本でその影響力が強いように思えてならない。

「日本財政 転換の方針」の著者である井出英策は「日本の租税負担率は先進国で最低だが痛税感は先進国の平均より明らかに高い」（注52）「社会的信頼度が先進国の中で最も低いため、政府への抵抗が増税を困難である」（注53）と指摘する。2007年に実施された国際世論調査によれば「国家ないし政府には、自活できない貧困者を救済する

責任がある」という質問に対し、日本は「絶対賛成」15%、「ほぼ賛成」44%、併せて59%と賛成回答率としては調査対象国47カ国中で最低だった（注54）。

「寛容なき社会」となってしまった日本で社会的連帯を強化することは可能だろうか。

資源分配の公平感などについて人間は特に強く文化の影響を受けるとの指摘があるが、日本に井手が主張するような「分かち合いの精神」がかつてあったのだろうか。

（注48）宇山卓栄「経済を読み解くための宗教史」角川出版、2015年、33頁

（注49）宇山卓栄前掲書、113～115頁

（注50）宇山卓栄前掲書、130～133頁

（注51）宇山卓栄前掲書、90～95頁

（注52）井手英策「日本財政 転換の指針」岩波書店、2013年、7頁

（注53）井手英策前掲書、14頁

（注54）木下光生「貧困と自己責任の近世日本史」人文書院、2017年、10頁

## 7. 貧困の公的救済に対する日本社会の冷たさ

「貧困と自己責任の近世日本史」の著者である木下光生は、貧困の公的救済について日本社会が世界的に見て突出した冷たさを示し、強烈な自己責任感を内面化するようになったのは「19世紀以降の近代的な現象」ではなく「もっと根深い歴史的伝統が潜んでいる」（注55）と主張する。

イングランドでは16世紀後半から17世紀にかけて、救貧法が制定されて教区単位での救貧税の徴収と週単位での定期的な救済費の支給がなされるなど恒常的な救貧制度が確立した（注56）が、近世の日本では生活保障の第一義的な責務はあくまで民間にあり、個別具体的な救済が基本であるとの考えだった。

国家が救貧を法によって規定し個の救済に乗り出したのは「8世紀以降の律令国家の時代」と「1874年以後、現代にいたる」2つの時期だったとする木下（注57）は、律令期の救済は「あくまで臨時的な措置」（注58）であり、日本最初の救貧法が制定された1874年以降も「極めて制限主義的な性格を帯びていた」（注59）と指摘する。戦後個別具体的な個に対する日常的かつ無差別平等な救済が法的、制度的に整備されたのにもかかわらず「制限主義的対応が現場で生じてしまっている」（注60）とする木下は個別具体的な個に対する救済についても「『働き方』と『素行』で左右される制限主義と強い自己責任観に裏打ちされた公開処刑的な社会的制裁をあわせ持つものだった」（注61）と指摘する。

貧困に陥った者が村の公的救済を受けるにあたって、金銭的な負担のない施しよりも経済的な負担が多少なりともかかる安価・低利な救済金品の購入・借用をあえて選ぶことが多かった（注62）ことが示すとおり、「タダで助けてもらう」ことに対する社会的な忌避感は徹底されていたようだ。

「日本社会は恒常的で十分な生活保障を良しとする歴史的教訓をまったく積み重ねてこなかった」とする木下は、貧困の公的救済に対する極度の冷たさという問題を解決することは「歴史的伝統をひっくり返すという絶望的な営みを意味すると自覚しなければならな

い」(注63)と結論づけている。

このような公的救済についての考え方の裏側には労働に対する価値観がある。先進諸国に比べ日本では今でも「働かざる者食うべからず」という価値観が強いと感じられるが、この価値観も再配分機能を阻害しているのではないだろうか。

(注55) 木下光生前掲書、248頁

(注56) 木下光生前掲書、267頁

(注57) 木下光生前掲書、278頁

(注58) 木下光生前掲書、280頁

(注59) 木下光生前掲書、281頁

(注60) 木下光生前掲書、283頁

(注61) 木下光生前掲書、288頁

(注62) 木下光生前掲書、308頁

(注63) 木下光生前掲書、310頁

## 8. 日本人の勤勉性

「日本人はいつから働きすぎになったのか」の著者である礪川全次は、「戦争遂行のために戦時生産力を担う労働者に対して労働意欲を全的に発現させることに成功したことで、日本人は戦後は働きすぎになった」(注64)と主張する。

サラリーマンが午後5時に退社し家族と夕食をとるという習慣がなくなったのは1950年代半ばだったとされている(注65)が、1950年代半ばから始まった「高度経済成長(1955～1973年)」によって労働時間が大幅に増加し、高度成長が終わった後もそうした状況に変化が見られていない。

戦争によって日本人は多くのものを失ったが、意気消沈することなく直ちに復興に向かって動き始めたが、最大の武器となったのは勤勉性だった。礪川は「国破れて勤勉性あり」(注66)としているが、確かに敗戦後の日本人は「勤勉性」という価値を疑うことはなかった。

1979年欧州委員会の対日政策最高責任者が作成した報告書(内部文書)の中に「日本人はウサギ小屋に住む働き中毒」といった記述があったことが明らかになると日本国内が大騒ぎになった。しかしこの文書で欧州委員会が強調したかったことは「ヨーロッパ社会では『勤勉』は反社会的な行為との考え方が広まったのに対し、日本人は勤勉、規律などを勤労倫理を高く保持し続けている」という点であった(注67)。「資本主義の精神」が誕生した欧州では1979年当時既に「勤勉」が過去のものとなりつつあったが、欧州から資本主義を学んだ日本人は戦後「勤勉」に目覚め、「その勤勉さは既に『働き中毒』と形容しうる段階に達している」と欧州委員会は捉えていたのである。当時の日本では「ウサギ小屋」問題をキッカケに自分たちの「働きすぎ」についての多少の反省はあったが、「勤勉さ」については「他国からの批判の対象ではない」と考えた(注68)。

1980年代に入ると、「社畜」という言葉が示すとおり勤勉性の弊害が深刻化し始め、過労死の問題も注目されるようになり、2010年前後から「ブラック企業」という言

葉が流行りだして現在に至っている（注69）。

「枠を壊して自分を生きる」の著者である石黒浩は「日本人は貧富の差がない、非常にフラットな民族なのでむしろ『社会の中で自分の役割を見つけよう』というモチベーションで働いている、だからよく働く」（注70）と指摘するが、日本人が労働を通して「自発的に組織に忠誠を尽くす」という行動原理はいささかも変わっていない。

（注64）礫川全次「日本人はいつから働きすぎになったのか」平凡社、2014年、202頁

（注65）礫川全次前掲書、214頁

（注66）礫川全次前掲書、202頁

（注67）礫川全次前掲書、231～233頁

（注68）礫川全次前掲書、233～234頁

（注69）礫川全次前掲書、235頁

（注70）石黒浩「枠を壊して自分を生きる」三笠書房、2017年、35頁

## 9. 残る仕事

日本ではやはり仕事なしでは社会は回っていかないようである。

井上は多くの労働が汎用AI・ロボットによって行われるようになっても「レジャーとしての仕事、楽しみの仕事は残る」と主張する（注71）。

鈴木も「仕事がなくなった私たちはローマ人のように5つの分野を追求しながら『充実した人生』を送ることができる」（注72）と指摘する。

鈴木が提唱する最初の生き方は芸術家である。鈴木は将来AIがコンテンツを量産すると想定しているので、「消えていくライブ芸術」に重点を置くべきだとしている。ロールモデルとして生け花やエアバンド（ライブで楽器の演奏をせずに演奏のフリをするバンド）などを挙げる。

2番目の生き方は、学者ではなく学究人である。鈴木は近未来科学の発見では人間はAIにかなわなくなると考えているので、学者という仕事には期待は持てないとしている。学術情報があふれかえる未来では、学者ではなく「自分にとって意味のある科学の成果を読みこなす」という読書家としての行き方が意味を持つようになるという。

3番目の生き方はアスリートである。「ロボット同士が戦うボクシングは面白くないし、自動運転車が競うF1レースも感動を生まないとする」鈴木は「人間という不完全な存在が限界領域で挑戦するからこそスポーツは美しいのだ」という。

4番目の生き方は趣味人である。音楽、ボート、アマチュア無線、鉄道、料理、酒、ゴルフなど趣味を挙げていくときりがない。

最後は遊び人である。古代ローマ人のように美食を味わいワインやビールを嗜み、それが朝から晩まで続く。「毎日24時間が宴会という日々が続いたとしても盛り上がり続けるトーク力を持った遊び人こそが最も華やかな生き方になる」という。

メイソンも「資本主義は人間が行っているサービス部門を大幅に拡大しなければならぬ。今は無給で行われていることの大半が社会的に有給の仕事にしなければならなくなる。

風俗関連の仕事と並んで「愛情をとまなう仕事（雇われガールフレンドなど）」が現れるかもしれない」（注73）と指摘する。

イベントも「社会的に価値がある生活に貢献するアート、音楽、工芸品などが生まれる」（注74）と指摘する。

「『人と人のコミュニケーションを要する職』の雇用が増加する」（注75）との指摘があるが、米国デューク大学の研究者キャシー・デビッドソンが2011年「子供達が大人になる頃、その65%はまだ存在していない職業に就く」（注76）と主張するように、今後新たに発生する職業は現在の常識とは大きく異なるものになるだろう（20年前に「プログラマーやブロガーという職業が今後生まれる」と予測してもそれを信じる人はほとんどいなかったように）。

「AIが神になる日 シンギュラリティが人類を救う」の著者である松本徹三も「AIが人間のために作ってくれた社会の上に個性的で冒険心に満ちた人たちが躍動できる仕組みを考えるべきだ」（注77）と主張するが、その仕組みを構築するためには「人間とは何か」という哲学的な問いまで掘り下げて考える必要があるのではないだろうか。

（注71）井上智洋前掲書、167頁

（注72）鈴木貴博前掲書、204～208頁

（注73）ポール・メイソン前掲書、296頁

（注74）ライアン・イベント前掲書、282頁

（注75）岩本晃一他「IoT/AIが雇用に与える影響と社会政策 in 第4次産業革命」経済産業研究所、2017年、10頁

（注76）2017年7月11日付プレジデントオンライン

（注77）松本徹三「AIが神になる日 シンギュラリティが人類を救う」SBクリエイティブ、2017年、53頁

## 10. 労働観の変遷

まず第一に労働観について見てみたい。

「未開社会には労働表象は存在せず、社会的人格として労働し生産する」（注78）

このように指摘するのは「近代の労働観」の著者である今村仁司だが、古代ギリシャの農業は宗教的又は道徳的表象によって幾重にも包まれ、農業労働のプロセスの区切りごとに伝統的な手続きに従って儀礼が実行されていた（農作業は神々との接触だった）（注79）。「こうした祈りに包まれ呪術と合体した労働は近代以前のどの地域どの時代にも普遍的に見られる」とする今村が次に注目したのは、南太平洋にあるニューブリテン島のマエンゲの人々が行う焼畑農業である（注80）。

彼らの仕事は日常的に絶えず共同体のメンバーによって審査されるが、その達成度を評価する基準は①仕事の審美的成就と②仕事の慎重な運び(将来への配慮)である(注81)。食べるための生産活動を美の基準で評価したという訳だが、色彩の美しさだけでなく匂いの良さも含む広い意味での審美性である。村人達は隣人の畑の作り方を見て、互いに評価し合って仕事の質の優劣を決めていくが、その際人格も審査される。審美的評価は倫理的

評価とつながり、視覚と嗅覚を調和させて美しく畑仕事ができる人、すなわち、畑を芸術作品に仕立て上げる人が道徳的に良い人とみなされるのである（注82）。 仕事の進行中の討議に加え1年の終わりにも互いに総括的価値討議が行われていることから、今村は「マエング族の人々の生活世界は労働と公共的討議空間が分離されておらず、このような営みを通じてマエング族は自尊心や虚栄心を公共的価値討議を通じて公共のための努力へと転換している」（注83）と主張する。

マエング族の1日当たりの労働時間は4時間であり、短縮された労働は限りなく遊戯やスポーツに近く「それなしには生きていく感じがしない」といった生理的欲求に基づいている（注84）という。

しかしこのような労働観はプロテスタントの誕生により根本から変わってしまった。世俗的世界を否定的に見ることに徹底したことがプロテスタントの特徴だが、救済のために資するとされた労働も「最後の審判」に迎えるまでの価値のない人間の営みの一つに格下げされてしまったからだ。「救済されるかどうか」あてもない中で、あらゆる欲望を断って没価値的に仕事に専念するというニヒリズムに近い発想から、皮肉にも合理的な生活態度、合理的な経営が誕生した（注85）のである。

その結果、共同体中心の社会は、個人が自身の内部に生活の根拠を置くために「私的所有」の概念が発達した市民社会へと転換したが、「市民社会が発展するにつれ、『必然性』の概念が隅々にまで浸透し、労働が経済世界を統括する原理上の位置を占めるようになった」（注86）と今村は指摘する。

このような現状を憂う今村は「人間の本質である労働は手段ではなくそれ自体が目的である」（注87）とした上で「労働は遊戯性と結びつくべきであり、そのための美学を確立することが重要である」（注88）と結論づけている。

（注78）今村仁司「仕事」弘文堂、1988年、4頁

（注79）今村仁司「近代の労働観」岩波書店、1998年、11～13頁

（注80）今村仁司前掲書、17頁

（注81）今村仁司前掲書、19～22頁

（注82）今村仁司前掲書、22～23頁

（注83）今村仁司前掲書、22～23頁

（注84）今村仁司「仕事」、14頁

（注85）今村仁司前掲書、139～143頁

（注86）今村仁司前掲書、149頁

（注87）今村仁司前掲書、203頁

（注88）今村仁司前掲書、214頁

## 11. 「人間とは何か」という問いが重要に

「人間とは何か」という議論はこれまで哲学者が専売特許だったが、現在AI研究者などが主導権を握り始めていると言っても過言ではない。

ロボット工学者の石黒浩は「人類は今まさに『人間とは何か』という普遍の問いに誰も

が対峙すべき時代に生きている、そんなときに古い枠組みにとらわれていては決して前進できない。絶対的な価値は誰にもないのだから価値を探すしか生きる方法はない」（注89）と指摘する。

「脳には妙なクセがある」の著者である池谷裕二も「ヒトの知能が礼賛される時代は終焉を迎える。運動能力がたどった経緯と同じである」（注90）とした上で「ヒトの最大の失策はチンパンジーとの比較で『ヒトらしさとは何か』を知性や知能などの側面を強調しすぎたことである」（注91）と指摘しているが、知性・知能に代わる人間性を定義できるのだろうか。

「アンドロイドのキスは甘いのか」の著者である黒川伊保子は「人間は感性（主観）の領域でいくらでも存在価値を示せる」（注92）「痛みのないAIには生み出せない言葉にこそ人間の尊厳がある」（注93）と主張する。黒川が指摘するキーワードは「案じる、心を寄せる、以心伝心」（注94）である。「自分の中にある痛みや悲しみ、癒やしや美しさを他者に伝えることはAIにはできない」（注95）「心を込めるとは自分の中にある筋肉や息や鼓動の癒やし、情熱を他者に与えようとする所作の中にある意識である」（注96）と指摘する黒川は、「人間は芸術などで新境地を拓くことができるが、AIでは不可能である」（注97）と主張する。

松本も「『美しい』とか『快い』とかいう感覚、それらがロジックやメモリーと混ざり合うことによって生じるものと思われる『楽しい』とか『おかしい』とか『苦しい』とか『悲しい』とかいった感情は人間特有のものである」（注98）として、生存・生殖本能といった生物の特性に根差している感情の重要性を主張する。「他の人間と交流して相手を楽しませたり、人間社会の中にある種のリズム（流行）を作り出す能力は人間が有利であり、自らの感覚、感情、価値観、信念を正直に見つめ直し、自由闊達に自らの感情を発露させ、自らの価値観に基づいた社会活動に汗を流すべきだ」（注99）とする松本は「左脳の重要性が減る分だけ肉体の重要性が今後高まる」（注100）と予測する。

（注89）石黒浩「枠を壊して自分を生きる。自分の頭で考えて動くためのヒント」三笠書房、2017年、65頁

（注90）池谷裕二「できない脳ほど自信過剰 パテカトルの万脳薬」朝日新聞出版、2017年、231頁

（注91）池谷裕二前掲書、233頁

（注92）黒川伊保子「アンドロイドレディのキスは甘いのか」河出書房新社、2017年、82頁

（注93）黒川伊保子前掲書、7頁

（注94）黒川伊保子前掲書、90頁

（注95）黒川伊保子前掲書、94頁

（注96）黒川伊保子前掲書、82頁

（注97）黒川伊保子前掲書、95頁

（注98）松本徹三前掲書、113頁

（注99）松本徹三前掲書、228頁

（注100）松本徹三前掲書、230頁

## 12. AIとの差別化の鍵となる「身体性」

「人工知能ブームの中で『生命』という考え方が置き去りにされている」（注101）

こう指摘するのは「人工知能の哲学」の著者である松田雄馬だが、「第3次人工知能ブームを支えているのは『環境の変化を膨大なデータによってすべて予測する』という考え方であり、ルールが変化しないということが『強化学習』による『学習』を可能にしており、『環境の変化に自らを適応していく』という生物本来の知のあり方と大きく異なっている」（注102）と主張する。

「不確実な世界において知能は身体を通して環境と相互作用することによって調和的な関係をつくり出していく」（注103）とする松田は「知というものの理解は身体に基づいて実空間という予測不可能な環境に適応していく仕組みである」（注104）と主張する。このようなメカニズムを有することから、動物は唐突に出くわした難局をうまく乗り切るために、学習していない新たな運動の組み合わせを即興的にすばやく作り出す能力が向上させたのである（注105）。

自らの判断で考え行動している人はいきいきとして見え、自然と人が集まり、調和的な関係を作っているが、私たちのコミュニケーションは他者の行為の意味に対して共鳴することで他者理解を行っており、こうした他者理解は自らの身体を通しての環境との相互作用が不可欠である（注106）。

「知には実空間を生きる身体が不可欠である。人間は身体を持っているからこそ自ら意味を作りだし、目的を自分自身で作ることが出来る」（注107）と主張する松田は身体を通じた他者理解を行うことができないとの理由から「物語や関係性を作り出すことができる人工知能はほとんど研究されていない」（注108）と指摘する。

鳥海も「身体があるからこそ知能が働く」（注109）とした上で、「現在のAIは人間の子供の当たり前の行動が苦手である」（注110）と指摘する。その理由はディープリンングでは身体性にかかわる動きを学習できないからである。考えることは身体動作を必要としないことから現在のAIの得意領域になっているのに対し、「器用にバランスを取る、何気ない雑談、豊かな感情表現」といった人間の子供の行動は、言語やシンボルよりも非言語コミュニケーションが主な役割を果たしている（注111）。目的を自ら作り出すことができないことから、AIは遊びそのものを楽しむことができないだろう。

このようにAIとの関係で人間性を定義する際に「身体性」が鍵を握るようである。

池谷も「脳はそもそも外界の情報を処理して適切な運動を起こす『入出力変換装置』であり、元来は身体とともに機能するように生まれたが、脳が大きくなるにつれて自律性が高まり身体への回路を省略して脳の内部だけでループを形成するようになった」（注112）とした上で「身体運動を伴うとニューロンが10倍ほど強く活動する」という事実が判明したことから、「脳にとって身体は大切な乗り物であり、『健全なる精神は健全なる肉体に宿る』の正しさが脳科学でも証明された（注113）」と指摘する。

脳科学の発展で「身体を介して受け入れる感覚刺激が感情を作り出し、それが人間に意志判断の決定を起こさせる（ダマシオのソマテック・マーカ仮説）」ことが明らかになっている。カントを始め西洋近代哲学者達が「身体性」を軽視してきたのは「身体を非常

に重要なものとして扱おうと、神となった人間とイヌやサルとの差異が示しにくかった」から（注114）だったのだろう。「身体にきく哲学」の著者である黒崎政男は「身体が生き生きしていなければポジティブな思考はできない。コンピュータによって情報が01化されてしまった現在、01化に背く物質的で個別身体的な感性のほうがかえって重要な存在になっている」（注115）と主張する。

- （注101）松田雄馬「人工知能の哲学 生命から紐解く知能の謎」東海大学出版部、2017年、xiii頁
- （注102）松田雄馬前掲書、207頁
- （注103）松田雄馬前掲書、74頁
- （注104）松田雄馬前掲書、75頁
- （注105）松田雄馬前掲書、13頁
- （注106）松田雄馬前掲書、86頁
- （注107）松田雄馬前掲書、205～207頁
- （注108）松田雄馬前掲書、211頁
- （注109）鳥海不二夫前掲書
- （注110）鳥海不二夫前掲書、191頁
- （注111）鳥海不二夫前掲書、194頁
- （注112）池谷裕二「脳には妙なクセがある」扶桑社、2012年、314頁
- （注113）池谷裕二前掲書、330～331頁
- （注114）黒崎政男「身体にきく哲学」NHK出版、2005年、41頁
- （注115）黒崎政男前掲書、186頁

### 13. AIとの共存が始まる将棋の世界

AIの社会利用が進んでいくとAIに人間がどう向き合うかが課題となるが、AIとの交流が進む将棋で起きていることが参考になるだろう。

「人工知能の核心」の著者である羽生善治は「AIには恐怖心がないことから違和感を覚える手が多い」（注116）AIには将棋における『美意識』というものがない」（注117）と指摘する。人間の思考は防御本能や生存本能に由来しており、生き延びていくために危険な選択や考え方を自然に思考から排除している。一方AIには身体がなく危険を感じることはないため、恐怖心や生存本能に関連するとされる感情は生まれようがない。

羽生は美意識について「人間の持つ『安心』や『安定』のような感覚に似ている」（注118）「人間は一貫性や継続性のあるものを『美しい』と覚えることから時間の概念が関係している」（注119）と指摘している。現在のAIが扱っているのは空間情報だけであり、時間に関する情報はわずかである（注120）。古代ギリシャでは時間という概念をクロнос（客観的な時間）とカイロス（主観的な時間）に二分していたが、カイロスは個人の身体をベースに把握される時間感覚である。主観的な時間感覚（カイロス）については現在でも全人類に共通する普遍的な概念がないことから、AIはカイロスという時間感覚を持つことは困難なのだろうか。

AIは時間の流れの中での文脈をつかむ能力が不足しており、小説のように時間の流れの中で共感を得ようとするジャンルは苦手のようなのである。

「コンピュータと将棋をするのは楽しくない」と指摘する羽生は「AIが普及したとき人間は意外と原始的な娯楽に戻るような気がする」「テクノロジーが進歩して仮想空間が当たり前になったときに将棋のような古くからある遊びが生き残るのではないか」（注121）と指摘しているのが興味深い。

江戸時代の将棋の世界は家元制度によって成り立っており、家元の務めは年に1回将軍の御前でその技を披露することから、将棋はアートの性格を有していた（注122）。羽生の口から「美意識」という言葉が出たのはこのような背景があったからだろうか。

AI将棋の申し子である藤井聡太も「今までのプロ棋士は『将棋が強い』というのが一番の価値だったが、プロ棋士の存在意義が問われる時代になっている。人間同士の将棋の対ソフトでは見られない人間ドラマである。その醍醐味をファンに示すのがプロ棋士の大事な務めである」（注123）と述べている。

羽生は創造性について「今までに存在したものを今までにない形で組み合わせることはAIの得意領域だが、破壊的イノベーションである『ふなっしー』は生み出せない」（注124）としているが、鳥海も「AIは非形式的なものに気づくのが苦手であるため、根本的な大きな発想とかひらめきは現在のAIにはない」（注125）と指摘する。

羽生はしばしば「接待はあまりにも人間的で、AIにとっては意外にも難易度が高い行為」（注126）と主張しているが、鳥海も「人間はAIと異なり相手の人間の思考パターンが理解できるのでそれに合わせて対応できる」と指摘する（注127）

「身体性」に立脚した美意識が、AIとの差別化をもたらす大きな要素と言えるのではないだろうか。

（注116）羽生善治「人工知能の核心」NHK出版、2016年、39頁

（注117）羽生善治前掲書、75頁

（注118）羽生善治前掲書、80頁

（注119）羽生善治前掲書、142頁

（注120）羽生善治前掲書、144頁

（注121）羽生善治前掲書、215頁

（注122）羽生善治前掲書、91頁

（注123）2017年10月10日付AbemaTIMES

（注124）羽生善治前掲書、47頁

（注125）鳥海不二夫前掲書、105頁

（注126）羽生善治前掲書、112頁

（注127）鳥海不二夫前掲書、112頁

#### 14. 「美意識」に注目し始めたビジネス界

世界のビジネスエリート達も美意識の重要性に注目し始めているようだ。

「世界のエリートはなぜ『美意識』を鍛えるのか」の著者である山口周は、世界のビジ

ネスエリート達がアートスクールや美術系大学によるエグゼクティブトレーニングを受講するケースが増加していること（注128）を指摘する。

その理由として山口は「論理的・理性的な情報処理スキルの限界が露呈しつつある」（注129）ことを挙げているが、カプランも「ビジネス現場の経験から数値に還元できないトレンドの方が結果を左右することが多い」（注130）と同様の見解を示している。

アートスクール等では観る力を鍛えるため「VTS（参加者は徹底的に作品を「見て感じて言葉にする」ことが求められる）」などが開催されている（注131）が、目的はパターン認識で奪われた「虚心坦懐に見る能力」を養うことである（注132）。

ビジネスリーダーに求められる役割は徹頭徹尾コミュニケーションであることから、詩を学ぶことの重要性も強調されている（注132）。山口は「日本の受験エリートは美意識に欠けているため、自分の有り様をシステム内の評価とは別のものさしで評価するという視点が欠如している」（注133）として現在の日本の現状を憂えている。戦前来日したリンドバーク婦人が評した「すべての日本人には芸術家の素質」（注134）はどこへ行ってしまったのだろうか。

美意識で遅れをとる日本だが、その中で山口が目にするのはマツダ車の魂動デザインである。魂動デザインは抽象的な精神論（動・凜・艶 その哲学は魂動）だが、その具体化において重視されているのが日本の美意識である。顧客に好まれるデザインではなく顧客を魅了するデザインであり、そのゴールは感動の提供である（注135）。

山口は「世界が巨大な『自己実現欲求の市場』になりつつある」（注136）17と予感しているが、工学サイドからも新たな動きが出てきている。

「感性的思考：文系・理系の壁を超える発想のために」の著者である長島知正は「感性工学における新しさとして期待されているのは日常生活の中で埋没しがちな感覚の世界を磨き、自らの生をいきいきさせることであり、感性的な思考の目的は分析ではなく創造である」（注137）とした上で「人間どうしの感性体（顔の表情ではなく身体内部から発せられるメッセージ）を交換する感性コミュニケーション」の重要性を強調している（注138）。

（注128）山口周「世界のエリートはなぜ『美意識』を鍛えるのか」光文社、2017年、10頁

（注129）山口周前掲書、15頁

（注130）ジェリー・カプラン前掲書、158頁

（注131）山口周前掲書、218頁

（注132）山口周前掲書、17頁

（注133）山口周前掲書、249頁

（注134）山口周前掲書、113頁

（注135）山口周前掲書、169頁

（注136）山口周前掲書、199～204頁

（注137）長島知正「感性的思考：文系・理系の壁を超える発想のために」東海大学出版部、2014年、156頁

（注138）長島知正前掲書、217頁

## 15. 美意識とは何か

ここで改めて美意識について考えてみたい。

美意識とは「美的な対象を受容し又は産出する際に働く意識」のことだが、美とはそもそもなんだろうか。

人間にとって重要な3つの価値として真・善・美があるが、美は実生活への影響が強くなく前二者に比べて影が薄い印象がある。

カントは、最初にした「純粋理性批判」で科学的な理性を定義し、次に書いた「実践理性批判」で道徳的な理性を議論し、最後に書いた「判断力批判」で真と善が美によって関連されていることを論証しようとした（注139）。

カントは「判断力批判」の中で「美は趣味という能力で判断される」（注140）とした上で、美的判断は主観的な原理だが万人の同意を要求するものであるという理由から「主観的普遍性を持つ」と規定した（注141）。美を享受する際の意識は事物への利害関心によって動かされることなくいわば自由な遊びの状態にあり、人々に物を所有する欲求とは別の楽しみをもたらすという意味である。

「美」という漢字は、「羊」の下に「大」の字がくっついていることから、「美について」の著者である今道友信は「犠牲をささげる羊が大きいという意味であり、美とは優れたものや立派なことに犠牲をささげるときに現れる輝きである」（注142）と主張する。

「美しいものには価値の放射があり何か人目を引く魅力のことを象徴的に光と呼ぶ」（注143）今道は「あらゆる条件の中で美を発見することが大切であり、美しい行為を行う者はすべて美の実践者である」（注144）と主張する。

「その輝きは自らの心から出る光でなければならず、苦しむ者が我々のささやかな行為によって癒やされ、そしてその心から指す光で世を美しくする」（注145）とする今道は今日若者の間で人気を博するロックやジャズ、動きが激しい肉体の躍動をジャズバレエなど生命のエネルギーの激しい発散を示すものにも美の要素を見出している（注146）。

人間は意識の中で美を構成し、美を発見する能力が年齢と共に深化する（注147）。

今道は「人格の充実」という視点から美を「生の高揚」と「枯淡の風雅」という2つに分類できるとしている（注148）が、後者は風雅を尊ぶ思想であり、「わび」「さび」「幽玄」などのキーワードで著名である。

筆者が目にするのは前者である。「生の高揚」とは人間の精神の生の激しい自己主張であり、ニーチェが予言した「生命への賛歌」である（注149）。野性的な叫びは人間性を抑圧しがちな現代社会の中で己の生命を復活させるためにはすべてを破壊するような激しいエネルギーが不可欠であるとの事実を示唆している。

「多くの現代芸術は出口なしの実存をそのまま表白しているだけだ」と不満を漏らす今道（注150）は「一人一人が日々の仕事や生活を美の実践として位置づける『生活芸術家』と生き抜くべきだ」（注151）と主張する。

生活芸術家になるためにはプライバシー重視の風潮の中にあって「自己の精神の内部を人前にさらけ出す」こと（注152）であり、美は賛美の対象であることから趣味であっても遊びのレベルからさらなる高みを目指すたゆまぬ精進が不可欠である（注153）。

美の対象もかつては現在より広がったようである。

「『美術品は高価である』という刷り込みは、旧支配階級にコンプレックスを持っていたブルジョアが自分の勢威を誇示するために作らせた王侯貴族の美術品を高値で追い求めた現象に端を発している」（注154）

こう指摘するのは「人はなぜ「美しい」がわかるのか」の著者である橋本である。橋本が「美しさは各人がそれぞれに創り上げるべきものであり、美しいが分かるというのは美に関する知識の獲得ではない」（注155）と主張するように、美の対象を狭く考える必要はなく、むしろその領域がどんどん拡大していくものと捉えるべきだろう。

「西洋美術史を解体する」の著者である白川昌生は「人間が人間らしくなるための知恵が教養であり、それを血肉化する技術が芸術と考えられてきた」（注156）と指摘する。

白川は古代インドのカーマストラの64芸を例に挙げ、「これらの技能は感覚・知覚・経験・実践を伴った具体的活動、修練によって身体化させることができ、個人の生活・人生を豊かにするものであった」（注157）としている。

美を身につける根本は他者や自然と共存し共鳴するためであり、広くて深い人としての思考や共感を育成することに他ならない。美はときに人々を感情的に一体化させる結合剤として、魂の実存的苦悩を軽減させ生きる力を与えるものとして、古代から現代まで作用してきている。美学的発想を有していた古代ギリシャ人も美のこと「全感覚の覚醒・活性化の方法」として捉えていた（注158）。

私たちは美をモノではなくコトとして捉えるという新たな美意識を有することが重要ではないだろうか。

（注139）杉山鼎「失われた日本の美意識」幻冬舎、2009年、105頁

（注140）今道友信「美について」講談社、1973年、20頁

（注141）今道友信前掲書、104頁

（注142）今道友信「美について考えるために」日美学園、2011年、110頁

（注143）今道友信前掲書、213頁

（注144）今道友信前掲書、55頁

（注145）今道友信前掲書、44頁

（注146）今道友信前掲書、235頁

（注147）今道友信「美について」、183頁

（注148）今道友信、「美について考えるために」100頁

（注149）今道友信「美について」、136頁

（注150）今道友信前掲書、172頁

（注151）今道友信「美について考えるために」、4頁

（注152）今道友信前掲書、36頁

（注153）今道友信前掲書、220頁

（注154）橋本治前掲書、68頁

（注155）橋本治前掲書、9頁

（注156）白川昌生「西洋美術史を解体する」水声社、2011年、17頁

（注157）白川昌生前掲書、39頁

(注158) 白川昌生前掲書、25頁

## 16. 本来の日本の美意識

次に日本人の美意識をみてみよう。

美意識についての一般的な解説は「いくつかの美的概念（わび・さび・幽玄など）を列挙し、連歌や能、茶道や俳句などの個別の芸能の歴史的展開を辿る」といったスタイルのものが多く、果たしてそうだろうか。わび・さびといった沈んだ印象を持つ美意識はただそれだけで形成されたものではなく、華美を尽くす文化の対として生まれたものである（注159）。安土・桃山時代に豪壮華麗な文化が花開き、江戸時代初期の美意識である「粹（すい）」は積極的に生き生きとしたもの（歌舞伎はその典型）だった（注160）。

「美の考古学」の著者である松木武彦は縄文時代の研究を通して日本の縄文式文様のユニークさが動的でダイナミックな感覚を呼び起こすという身体感覚を通じての情動に注目している（注161）。

「なぜ人は美を求めるのか」の著者である小穴晶子は、「タマフリの思想を感覚で捉えられるようにしたものが美として享受される」（注162）と指摘する。日本の古代の思想に見られる魂（タマ）は実体ではなく生命力のことであり、「タマフリ」はこの世に遍在している生命力としてのタマを振ることによって活性化することを指していた。タマフリによって活性化されるエネルギーのものは光であり最終的には太陽エネルギーである。日本では神社などの聖域では御幣が飾られているが、御幣が振れることによってその場所の生命エネルギーが増大しその場所は神聖な場所となる（注163）という訳である。

三島由紀夫も「文化防衛論」の中で「日本文化は行動様式自体を芸術作品化する特殊な伝統を持っている」（注164）と指摘するように身体動作を通じた生命エネルギーの活性化・増幅に日本文化（美）の神髄を見ていた。

日本人の美意識は社会に与える影響は大きいようである。

「八つの日本の美意識」の著者である黒川雅之は「美意識は日本人が物事を判断する非常に大きな規範になっている」（注165）と指摘する。西洋のように神の価値基準で社会を統べるのではなく「心の中で生理的な美を求めながら他者へ配慮する」という行為が全体として社会秩序を成していたというのが日本の特徴である（「日本に哲学なし」と主張した中江兆民が「美学」という言葉の生みの親である（注166））。理屈ではなく、「美しいとか」「気持ちがいいとか」「どきっとしたとか」という人の心と体を心地よくする感情が日本社会には大事なのである（注167）。

「日本の美意識は動物的な全身感覚に似ている」（注168）とする黒川は「日本人は計画の意志を放棄して偶然という自然の摂理に任せてしまうと宇宙が自分を迎い入れてくれると考えている」（注169）とした上で「気を感じる能力で日本人は『間』という生き生きとした生命的な感覚の空間と時間をつくり出している」（注170）と指摘する。

その日本の美意識に明治維新が悪影響をもたらした。。

「失われた日本の美意識」の著者である杉山鼎は「江戸のいきという美の感性は人の行為にもかかわる美しさだったが、明治以降行為の美しさとしての品格を伴った感性は無力となり、単なる外観的な見栄が中心となった」（注171）と指摘する。

江戸時代の行為の美しさは共産主義思想の汗にまみれる労働の美しさではなく、潔さとマナーに適うことが備わった洗練された仕事ぶりでの美しさだった（注172）

演奏者の心の運動感覚が鑑賞者の心の運動感覚に伝達されるように、画家の心の中に作用した身体的な運動感覚が鑑賞者の心に伝達される浮世絵はその運動感覚ゆえに概念的な拘束からの自由が感じられる（注173）。欧州は浮世絵に触れて18世紀の優美な曲線（ロココ調）を思い出し（18世紀の啓蒙思想は感性が人間の理性と並ぶ能力としていた（注174）」、印象派が開いたのは有名な話である。

「問題の根源は明治の日本が受け入れた近代思想が理念を欠いた合理主義でしかなかった」（注175）とする杉山は「明治以降の日本では江戸時代に見られた自由でのびのびした運動感に溢れた作風が失われた」（注176）と嘆いている。

（注159）板垣俊一「日本文化入門 その基層から美意識まで」武蔵野書院、2016年、126頁

（注160）杉山鼎前掲書、151頁

（注161）松木武彦「美の考古学」新潮社、2016年、94頁

（注162）小穴晶子「なぜ人は美を求めるのか 生き方としての美学入門」ナカニシヤ出版、2008年、7頁

（注163）小穴晶子前掲書、8頁

（注164）三島由紀夫「文化防衛論」筑摩書房、2006年、34頁

（注165）黒川雅之「八つの日本の美意識」講談社、2006年、11頁

（注166）今道友信「美について考えるために」、97頁

（注167）黒川雅之前掲書、12頁

（注168）黒川雅之前掲書、90頁

（注169）黒川雅之前掲書、184頁

（注170）黒川雅之前掲書、162頁

（注171）杉山鼎前掲書、19頁

（注172）杉山鼎前掲書、97頁

（注173）杉山鼎前掲書、71頁

（注174）長島知正前掲書、86頁

（注175）杉山鼎前掲書、17頁

（注176）杉山鼎前掲書、46頁

## 17. 美意識社会だった江戸時代

「日本の美は生活全体と密着していた。どの時代でも生活の一部だった」（注177）

こう主張するのは「日本美を哲学する あはれ・幽玄・さび・いき」の著者である田中久文だが、日本では美的実践は誰もが参加しうるものであり、その活動は集合的かつ共同的だった（注178）。創作者と享受者の区別なく相互に入れ替えるという特徴を有しており、芸術家という存在は職業的に未分化だった（注179）

西洋では芸術的作品が創作される能力が天才に限られるとされたのに対し、日本では「修

行を通じて誰もが名人になれる」との発想が一般的だった（注180）。名人には人格全体の陶冶が重んじられ（注181）、芸道においては身体を通した「型」の習得が重要だった（注182）。

「逝きし世の面影」の著者である渡辺京二は「江戸時代の日常生活は芝居じみており、生活の美化・趣味化が社会全体の共通感覚となっていた」（注183）と指摘する。

武士と町人ではお辞儀するときの首の角度や手の位置も目に見えるように差異化されており、人足の労働は唄で飾られるなど生活が芝居化されていた現象について渡辺は「現実の苦難を軽減する効果があり、江戸の治安の良さを支えていた」（注184）と評価する。

「縮み志向の日本人」の著者である李御寧もかつての日本について「日本座という劇場の中で一億の日本人が総俳優となっている」（注185）と指摘する。李が目にするのは日本人が『肌で感じる』という触覚言語で抽象的な人間関係まであらわそうとする」（注186）ことである。人と人を結ぶのは具体的な実感ある触覚的な肌触りであり、肌で結ばれる具象的な人間関係とは小集団であってこそ初めて可能である。

李は人と人との関係を肌で触れあう距離にまで縮める傾向を「寄合文化」と呼んでいるが、主客を中心として座を作るためには座の参加者全員が俳優となり「亭主ぶり」「客人ぶり」を演じなければならない（注187）。

演劇と同様に茶の湯も進行のための脚本と参加者の演技により主と客が深い一体感をつくる（一座建立）。「三昧」という言葉は客の見る前で全課程を見せて芸を披露するところに力点が置かれており、料理の場合も味よりもそれを作った人の苦勞とその過程を味わうことで一体となろうとするのが日本文化の特徴（注188）なのである。

「江戸はスゴイ」の著者である堀口茉純は「江戸各地の寺社での独自の行事が毎日のように行われており、幕府の役人より役者の方が断然人気があり儲かっていた」（注189）と指摘する。「火消しのダンディズム」に代表されるように「躍動する美」に溢れており、イベント毎に大道芸人が出沒して場を盛り上げていた（注190）。

「乞胸 江戸の辻芸人」の著者である塩見鮮一郎も「庶民が喜んで集まるのは歌舞伎よりも宮芝居それよりも通俗な見世物小屋、それに辻芸だった。胡弓や琵琶や三味線の音がするところはいつも黒山の人ばかりだった」（注191）と指摘するが、辻芸人の多くは改易によりお取り潰しのあった各藩からリストラされた武士だった。浪人となった武士達の多くは職を得ようとして江戸に出てくるがなかなか仕事が見つからなかったため、やむなく武士という身分を捨ててでも家族を養う必要から辻芸人(乞胸)となった(注192)。辻芸人達が披露する「猥雑にして愉快的な表現」「肉体を鍛錬した軽業」「知恵を絞ったからくり人形」「江戸万歳などの滑稽な笑い」などは江戸庶民の喝采の的だった(注193)。

江戸時代の芸能で歌舞伎とともに隆盛を極めたのは神迎いの演劇として相撲だった。

「大相撲で解く和と武の国」の著者である舞の海秀平は、大相撲の興行は「力士が優勝をめぐる競い合う大会ではなく、自分たちの出世の行方を左右する技量審査を見ていただいている」（注194）と指摘する。

観客は力士達の「努力する自由、出世する平等」の有り様を見て、「一種の夢の世界を見て自分と重ねながら視線を送っている」とする舞の海だが、「無駄には人の目を大切にするという意味がある」（注195）と主張する。

農村部も美と無縁ではなかった。

「民俗と民藝」の著者である前田英樹は「田植えは祭りであり、田植唄は田植えの働きそのものとしてその働きの内側から湧いていくものだった」として、江戸の農民達は働くことを唄そのものにしてきた」（注196）と指摘する。

「田植えは村人の経済行為であると同時に信仰の儀式であり、歌心とは田の神から言霊を迎え入れる心だ」とする前田は、「田植唄は祝詞と起源を同じくする」（注197）と指摘する。民謡の起源となったウタは「労働と祭の区別がない集団からおのずからに発生した」ものであり、「一緒に働く者が動きの調子を合わせ心を合わせ笑いを合わせて仕事をはかどらせる」ことを目的とした労働歌だった（注198）。前田によれば文化を産み出し洗練させる暮らしの場所が必要だった農民達は身近な都市の建設にも協力した（注199）という。

しかし明治維新以降、辻芸人達の存在を保証していた社会の風潮が崩れ、「働かざる者食うべからず」の思想が広まった。「辻芸人は路上をたむろする薄汚い存在」と化していたが、明治の知識人達が躍起になったのは西欧の高尚な音楽、オペラ、バレエ、新劇、文学、詩などを「芸術として」輸入し学習することだった（注200）。

（注177）田中久文「日本美を哲学する あはれ・幽玄・さび・いき」青土社、2012年、145頁

（注178）田中久文前掲書、166頁

（注179）田中久文前掲書、170頁

（注180）田中久文前掲書、156頁

（注181）田中久文前掲書、157頁

（注182）田中久文前掲書、159頁

（注183）渡辺京二「逝きし世の面影」平凡社、2005年、229頁

（注184）渡辺京二前掲書、229頁

（注185）李御寧「縮み志向の日本人」講談社、2007年、212頁

（注186）李御寧前掲書、213頁

（注187）李御寧前掲書、219頁

（注188）李御寧前掲書、224頁

（注189）堀口菜純「江戸はスゴイ」PHP出版、2016年、223頁

（注190）堀口菜純前掲書、246頁

（注191）塩見鮮一郎「乞胸 江戸の辻芸人」河出書房新社、2006年、61頁

（注192）塩見鮮一郎前掲書、31～33頁

（注193）塩見鮮一郎前掲書、198頁

（注194）舞の海秀平「大相撲で解く和と武の国」ベストセラーズ、2017年、64頁

（注195）舞の海秀平前掲書、69頁

（注196）前田英樹「民俗と民藝」講談社、2013年、13頁

（注197）前田英樹前掲書、18頁

（注198）前田英樹前掲書、17頁

（注199）前田英樹前掲書、27頁

(注200) 塩見鮮一郎前掲書、198頁

## 18. デモクラシーに必要な要素

かつて旧ソ連の人工衛星スプートニクの打ち上げ成功に衝撃を体験した哲学者のハンナ・アーレントは技術の進歩により人「人間の本質が大きく変容する」(注201)と考え「人間の条件」を書き上げたが、アーレントが指し示す「人間の条件」は、AIが社会に導入されつつある現在の方がより差し迫った課題ではないだろうか。

アーレントは人間の「働き」を①生物的生存のための「労働」と②時空を超えた作品を作り出すための「仕事」、そして③他者と交わり誇りを持って生きること(ポリスへの参加)を意味する「活動」に分け、本来人間が行うべきなのは③の「活動」だと主張し、現代社会では①の「労働」の占める位置が大きくなり過ぎていると警告を発した(注202)。

労働では「人間は孤立し「世界」が失われてしまう」と考えたからだが、アーレントが考える「世界」とは、「物の介入なしに私たちが直接他者に働きかけて生活空間をよりよいものとするための行為が展開される場」(注203)のことを指すが、政治的な活動が純粹に展開される公共的な領域よりも広いものを想定していたようだ。

アーレントが「活動」のモデルとしていた古代ギリシャのポリスにおいては、政治的指導者や裁判官などとともに人々の間で名声を博し有名人になれるような活動(芸能人やスポーツ選手)にも最高ランクが与えられていたと言われている。日本人と同様「セミの鳴き声を美しい」という感性を有していた古代アテネ市民は、公的領域での活動に参加するための基盤を確保するという観点から奴隷所有が奨励されていた(1市民当たり2~4人)。他の人々との関係を持っていることが人間としての生の本質と考えたアーレントが「活動」に求める必須の要素は、「一つの人格を持った存在として公的領域に自分の姿をさらすこと」である(注204)。

池谷が「自分について話すとき、快感の脳回路が活性化、自分をさらすのは気持ちがよい」(注205)と指摘するように、「活動」とは何か新しいことを始めようとする自発性の発露であり、瞬間的な輝きを伴う。他者の前で自他の違いを際立たせ「自分が誰か」を明らかにしようとする活動である。だからこそ物語が生まれる(注206)。人々が活動することを作り出された共同体の中で人々が存在した証が記憶され歴史として語り伝わることになるが、これにより人間はアイデンティティを獲得できることになる(注207)。

「経済を中心とする合理化が人間の自由を奪う」と捉えたアーレントは「芸術の一翼を担う演劇は政治の本質である活動に近い」と考え、「演技を通して輝くことを追求し続けることが人間としての目指すべき目的だ」(注208)と結論づけている。

「初めて民主制を実践したアテネ市民は、異なった価値観を摺り合わせるために2つの新しい対話の練習方法(哲学と演劇)を開発した」(注209)と指摘するのは「芸術立国論」の著者である平田オリザだが「アテネで開かれた演劇祭には、毎年数百人の市民がコロス(合唱隊)として参加することが半ば義務付けられ、舞台に参加した市民は翌年観客として演劇祭に参加していた」(注210)という。平田によれば歌舞伎見物をする江戸の庶民達は日本舞踊や浄瑠璃の習得を通じて歌舞伎の諸要素に精通しており、舞台に参加するという視点で客席に座っていた(注211)。

「芸術心理学の新しいかたち」の共著者である安藤花恵は「演じる者と見聞きする者の緊張関係によって成立し発展してきた演劇は遊戯と呼ばれる競技の領域であった」（注212）と指摘するが、国家的行事となった春の祭典には奉納劇の競演が三日にわたって盛大に催され、勸進元の金持ちの市民が費用を負担し、俳優組合のメンバーは兵役免除と安全を保障されていた。青春の生のリズムに生きた古代ギリシャ人は奴隷制を前提としながらも自由に喜びと美をあこがれる生活をしていたのである（注213）

「僕らの社会主義」の著者である山崎亮は「美しいモノを見たという体験を人に伝える喜びが大事」であり、「正しさを基準にするとそれぞれ1～2人のチームしかできないが、楽しさを基準にすれば5～10人のチームができる」（注214）と指摘する。だが学校で楽しさについての定義を習うわけでもなく、ましてや楽しみを生み出す力を高めることも肯定もされていないのが現状である。「モノを前提とせずに活動や生活が持つ意味を捉え直してみても、モノがなくても楽しくする『楽しさの自給率』を上げる」（注215）ためには各人がそれぞれの分野でナンバーワンを競い、切磋琢磨しながら連帯すればいいのではないだろうか。デモクラシーも「楽しい」という美的側面に注目すればもっと機能にするようになるのではないだろうか。

（注201）仲正昌樹「ハンナ・アーレント『人間の条件』入門講座」作品社、2014年、14頁

（注202）仲正昌樹前掲書、29頁

（注203）仲正昌樹前掲書、34頁

（注204）仲正昌樹前掲書、82頁

（注205）池谷裕二「脳はなにげに不公平 パテカトルの万脳薬」朝日新聞出版、2016年、25頁

（注206）仲正昌樹前掲書、37頁

（注207）仲正昌樹前掲書、38頁

（注208）仲正昌樹前掲書、116頁

（注209）平田オリザ「芸術立国論」2001年、集英社、2001年、193頁

（注210）平田オリザ前掲書、206頁

（注211）平田オリザ前掲書、206頁

（注212）安藤花恵「芸術心理学の新しいかたち」誠信書房、2005年、260頁

（注213）永野藤夫「世界の演劇文化史」原書房、2001年、35頁

（注214）山崎亮介他「僕らの社会主義」筑摩書房、2017年、41頁

（注215）山崎亮介他前掲書、157頁

## 19. 美が有する社会性の源は「振動」にあり

美が有する社会性についてさらに深掘りしてみたい。

AIが管理を行っているアマゾンの倉庫で商品を割り振らずに片っ端から棚放り込まれている例を挙げながら、カプランは「情報処理の限界がないAIは社会をカテゴリー化する必要がないことから、AIが主導する社会では人々の日常生活のさまざまな面で整然が

雑然に変わっていく」（注216）と指摘する。

社会のマナーや倫理の問題にも「美意識」が大きく関わっている。身体性に基盤を有する美意識を持たないAIが社会で大きな影響力を持つ時代になれば、人間自身が社会を美しく保つ役目はますます重要になるだろう。

「社会美学への招待」の著者である宮原浩二郎は人々の間の理想的な社会的協働のあり方に美を見だし、日常社会生活の美的認識を目指す「社会美学」の普及に努めているが、「正義は美として現れたときにはじめて私たちの感性に訴えかけることができる」（注217）という注目すべき発言をしている（日本語には道徳に美しいという形容詞を付ける「美德」という言葉がある）。

「道徳性は知覚的な鋭敏さが必要だが、美と出会うことによって人は人間の貴重さ・繊細さ、傷つきやすさへの気づきをもたらすことから、正義への感受性を養うことができ」（注218）、「美の体験は自ら進んで主役の座を明け渡しいつでも脇役になる用意があることを可能にする」（注219）からだとする宮原は「美の経験が私たちの興味関心を私的な快樂から公共的な正義に向かうように導いてくれる」理由について「美は神経の振動であって美的感覚とは感覚の共鳴であり、共鳴によって他者に伝達でき社会的美意識となる」というギュイヨー（19世紀後半の仏哲学者）の説を紹介している（注220）。

美的感動の中心に振動をおけば、振動は孤立したものではなく相互に伝達し合う連帯的なものである（注221）という訳だが、このことを最新の生命科学も同様の見解を持つに至っている。

松田は「個々のホタルの光の振動はお互いに影響を受け合い、そのリズムを少しずつ変化させるというひきこみ現象」を例に挙げながら（注222）が、「個々のリズムを通して全体が一つの生命を奏でる現象は進化の過程を経て発達させた社会性と関係がある」（注223）と主張する。神経細胞間の関係は興奮性（自らの発火によって他を発火させる関係）と抑制性（自らの発火によって他を発火させないように抑制する関係）とのバランスを変化させることで作り出され、これが振動となる（注224）が、振動を引き起こす振動子が興奮性と抑制性のバランスにより環境との調和的な関係をつくり出すことで、生命は不安定な環境でも生きていくことができるのである（注225）

このような事実を元に松田は「生命の至るところで観察される振動現象は、人間や細胞を含む生命における社会性や秩序といったものを成り立たせる根本原理である」と主張する（注226）が、生命現象における振動を持続させるためにはエネルギーの流入が欠かせない（注227）。

私たちの脳は個々の神経が振動することで自己と社会との関係を能動的に作り出していることは「振動現象を伴う美は社会性を有する」ことを証明したことになる。

（注216）カプラン前掲書、155頁

（注217）宮原浩二郎「社会美学への招待 感性による社会探究」ミネルヴァ書房、2012年、282頁

（注218）宮原浩二郎前掲書、291頁

（注219）宮原浩二郎前掲書、293～294頁

（注220）渡辺茂「美の起源 アートの行動生物学」共立出版、2016年、4頁

- (注2 2 1) 宮原浩二郎前掲書、3 2 3 頁
- (注2 2 2) 松田雄馬前掲書、1 4 1 頁
- (注2 2 3) 松田雄馬前掲書、1 4 0 頁
- (注2 2 4) 松田雄馬前掲書、1 6 4 頁
- (注2 2 5) 松田雄馬前掲書、1 6 7 頁
- (注2 2 6) 松田雄馬前掲書、1 6 3 頁
- (注2 2 7) 松田雄馬前掲書、1 4 6 頁

## 20. 連帯の決め手は歌と踊り

心理学（多重知能理論）によれば、芸術的知能は8つの基本的な知能のうち「音楽的知能、空間的知能の一部」に加え「身体—運動的知能」が担っている（注2 2 8）とされているが、動的な美はとりわけ社会性が高いようである。

「集団のリズム行動と連帯意識の深い関係がある」（注2 2 9）

このように指摘するのは「初めに動きありき 身体と感動の行動学」の著者である平松哲司だが、最も古い音楽の形であるビートを伴う音楽は共同体の成員に大きな共感を醸し出していた（注2 3 0）。シンクロナイズする行動が個々の成員に特別なつながりを持った感覚を生じさせる（注2 3 1）ことを重視する平松は「音楽に合わせて踊ることは個人の境界の消滅をもたらすことから、定期的に集団でダンスや音楽を楽しむ催しを行うことは現代社会にとってその必要性が高まっている」（注2 3 2）ことを主張する。

「人はなぜ歌うのか」の著者であるジョーゼフ・ジョルダニアも「リズムに乗って大声で歌うことの中核的な機能は我々の遠い祖先たちを特別に高揚した精神状態に置くことだったが、人々が伝統的な文化との関わりを失うと社会において歌うことの役割が減少する」（注2 3 3）と指摘する。

原始時代の人間にとって歌うことは肉食獣に発見されるなど危険な行為だったが、肉食獣から身を守り積極的な屍肉食を入手するために不可欠な行動だった（注2 3 4）ようである。歌うことによって私たちの祖先は、個々の間に目には見えない強力な精神的ネットワークを創りだし全員を一つの集団的超個性へと変身させ共通の利益のために宗教的な献身へと導いてきたのである。集団的同族意識、戦闘トランスを催したのはは集団の歌唱と大音量のリズミカルなドラミング、そして激しい身体運動だった（注2 3 5）。

世界でもっとも幸福とされているデンマークの国民が合唱好きである（注2 3 6）

歌に溢れていた江戸時代の治安の良さが改めて立証された形だが、AI導入が拡大するに伴う治安悪化を防ぐためには歌と踊りが肝心と言うことなのだろうか。

- (注2 2 8) 子安増生「芸術心理学の新しいかたち」誠信書房、2005年、16頁
- (注2 2 9) 平松哲司「初めに動きありき 身体と感動の行動学」幻冬舎、2017年、87頁
- (注2 3 0) 平松哲司前掲書、264頁
- (注2 3 1) 平松哲司前掲書、158頁
- (注2 3 2) 平松哲司前掲書、278頁

(注233) ジョーセフ・ジョルダーニア「人はなぜ歌うのか」アルク出版、2017年、20頁

(注234) ジョーセフ・ジョルダーニア前掲書、197頁

(注235) ジョーセフ・ジョルダーニア前掲書、203頁

(注236) マイケル・ブース「限りなく完璧に近い人々 なぜ北欧の暮らしは世界一幸せなのか？」角川書店、2016年、61頁

## 21. 美的判断は脳の報酬系部位が司る

美の効用は社会性ばかりではない。最近の脳科学で新しい動きが生まれている。

「感性的認識」という主要概念が18世紀半ばのドイツの哲学者バウムガルテンに由来するなど美学は長らく哲学の分野で議論されてきた。21世紀に入ると英国の神経科学者S・ゼキが視覚芸術を神経科学的に研究する「神経美学」を立ち上げたが、美的知覚の経験を経験科学的に裏付ける神経美学は既に興味深い発見をしている。

「美の起源 アートの行動生物学」の著者である渡辺茂は「美的判断は素早い環境評価の必要性から生まれた」（注237）と指摘するが、このことは美意識が生存本能に結びついていることを意味する。渡辺はまた「ジャンルにかかわらず美を感じると脳内の同じ場所が活性化している」（注238）と指摘するが、カントの主観的普遍性が証明されたことになる。興味深いのは渡辺が「美的判断と道徳判断は脳内の機構として同じ部位（内側眼窩前頭野）を使っている」（注239）と指摘していることである。

眼窩前頭皮質は前頭葉の下部にある領域にあり、この部位は報酬を得た場合に活性化する脳内領域として位置づけられている。このことは美に接すること自己と対象が一体的な関係になったという一種の社会的報酬が得られることを意味するが、美を求める行為の目的は「つながり」だ（注240）ということがはっきりしたのである。

さらに踏み込めば「報酬期待を司る前頭葉眼窩部の活動が高まりこれによって快感情が生じる」という点で「美の鑑賞」が経済学概念（報酬期待）で説明できることがわかったことである。高価な絵画などは既に経済的な対象となっているが、今後美の鑑賞自体が新たな欲望の対象になる可能性があるのだ。

「美の多くが人間関係を演出し社会を複雑に組織化していくのと経済的価値に役立てられている」とする松木は「身体へと投じられるもの（経済資本）よりもヒトの脳の働きを通じてはじめて価値づけられるもの（美の資本）が重要になるのではないか」（注241）としているが、最新の脳科学はその可能性を示唆していると言えよう。

(注237) 渡辺茂前掲書、18頁

(注238) 渡辺茂前掲書、56頁

(注239) 渡辺茂前掲書、51頁

(注240) 川畑秀明「脳は美をどう感じるか」筑摩書房、2012年、99頁

(注241) 松木武彦前掲書、36頁

## 2.2. ハングリー・モチベーションが通用しなくなった若者

「管理職になりたくない」という若手社員がここ数年で急増している（注242）。リクルートマネジメントソリューションズが3年毎に実施している「新人・若手の意識調査」によれば、「管理職になりたい」「どちらかといえばなりたい」と回答した割合が2016年の新人は約32%となった（2010年の新人は約56%）。

最近の若者には「ハングリー・モチベーション」の価値観だけでは通用しなくなっているようだ。

「若者を中心に実存的な問いを抱えたクライアントが増加しているのは、物質的・経済的な満足がある種の飽和点に達し、私たちに『生きる意味』を与えることができなくなったことを示す」（注243）

このような指摘をするのは「仕事なんか生きがいにするな」の著者泉谷閑示だが、「人はたとえ『低次の欲求』が満たされないような極限状態でも、むしろそれだからこそ「高次の欲求」である「意味への意志」を激しく求めるものなのだ」と主張する（注244）。このような状況に対し泉谷は「頭で損得勘定を考える『意義』ではなく、『心=身体』による感覚や感情の喜びによって捉えられる『意味』をもっと重視すべきだ（注245）と主張する。人が生きる意味を感じられるのは、「心=身体」が様々なことを味わい、喜ぶことができる環境があるかどうかにかかっている（注246）。

「自由からの逃走」の著者であるエリック・フロムは芸術家のことを「自分自身を自発的に表現することができる個人」と定義している（注247）が、真の意味での美の実践があつてこそ、己の深層に向き合い、そこから湧き上がってくる表現を感じるからなのだろう。

泉谷はそのために「ただひたすら何かと戯れるという遊び心を持ち、自分の行動を即興に委ねて偶然に身を置き、決まり切った日常をエキサイティングな発見と創意工夫に満ちたものに変貌させる」（注248）ことを推奨する。

「私たちは真に憧れるものを持っていなければ進んでいけないような時代を生きていくことになる。思想や芸術を自分を飾り立てるために用いるのではなくそれを食べて血肉にしなければ進んでいけないところに私たちは差し掛かっている」とする泉谷は「命そのものには本来意味や目的はないが、なにより美的であること、人生を楽しむことが大事であり、みんなが一人一人の小径を歩くマイノリティとなるべきだ」と主張する（注249）。

「遊びと人間」の著者であるロジェ・カイヨウも「遊んでいる子供達は一人一人が個別の世界を持っているのではなく全体で一つの遊びの世界に溶け込んでいる」（注250）とした上で「遊びに心が開かれた状態で人々は情動を共有して溶け込むことで意識が「面」のように広がっていく」（注251）と指摘する（注）。現代社会は個人主義が極度に肥大化する社会であり、そこでの人間関係は徹底的な合理化と自己コントロールを進める「点」の意識に支えられているため、感性はこわばり、余裕やゆとりがなく、他者との同時性を成り立たせている「面」の意識がなくなっているが、遊びにより意識のあり方が「点」から「面」へ広がれば、身体的にぶつかってこそ生じる人格と人格の出会いが復活する（注252）のではないだろうか。

（注242）2017年12月4日付東洋経済オンライン

- (注243) 泉谷閑示「仕事なんか生きがいにするな 生きる意味を再び考える」幻冬舎、  
2017年、9頁
- (注244) 泉谷閑示前掲書、51頁
- (注245) 泉谷閑示前掲書、106頁
- (注246) 泉谷閑示前掲書、119頁
- (注247) 泉谷閑示前掲書、135頁
- (注248) 泉谷閑示前掲書、170頁
- (注249) 泉谷閑示前掲書、188頁
- (注250) 松田恵示「福祉社会のアミューズメントとスポーツ 身体からのパースペク  
ティブ」世界思想社、2010年、98頁
- (注251) 松田恵示前掲書、102頁
- (注252) 松田恵示前掲書、104頁

### 23. 趣味と仕事を直結させる

日本の若者達も同じ考えを持ち始めている。

「個人のキャラクターが生活スタイルに根差した労働メソッドが求められている」と主張する「超AI時代の生存戦略 インギュラリティ<2040年代>に備える34のリスト」の著者である落合陽一の本のモットーは「ワーク・アズ・ライフ」(注253)だ。余暇のようにストレスレスな環境で働き、ストレスがたまりにくい趣味性の高い仕事に就くことが大事だという趣旨である。仕事にとって大事な「趣味」性について落合は「合理的で画一的でないものから趣味から見つけやすい。人間は環境から学ぶ態度から後天的にどんどん特徴的になっていくことができる。その速度が速いか遅いかだけの違いである」(注254)と指摘する。好きなことをしていれば「どきどきしたい」「充実感を得たい」「単純に気持ちが良い」と感じることができる。落合は「自分の喜びと社会の喜びをマッチングさせた上で、自分でゲーム的なフレームワークを考えて仕事を遊びに変えていく」ことの必要性を強調する(注255)。

超AI時代における生き方について落合は「特定のパイを奪い合うのではなくパイをどうやって広げるかと考え、同様の事例があればそこから先に自分がどういう価値を足せるのかを考えるというマインドセットを持つことが肝心である。必要なのは信じるに足るパラダイムやフレームであり、各自の幸福論やビジョンを追求する生き方だ」(注256)としている。

「99%の会社はいらない」の著者である堀江貴文も「以前は存在していなかった仕事を見かけるようになった、特にネットを利用した仕事で顕著である」(注257)と指摘する。「『遊びの達人』が10年後のビジネスを作る」とする堀江だが、「仕事は娯楽であり、趣味であり、エンターテインメントであるべきだ」(注258)と主張する。

彼がその例で挙げているのはコンビニアイス評論家であるアイスマン福留である。コンビニエンスストアで販売されるアイス商品の味と魅力を紹介するホームページを開設しているが、本人がびっくりするほど活況を呈しているという。

羽生が指摘した「ふなっし」の生みの親であり「『ない仕事』の作り方」の著者である

三浦じゅんは「興味の対象を大量に集め、『自分をなくす』ほど我を忘れて夢中になって取り組み、自分を洗脳する。趣味は突き詰めなければ意味がない。「ひとつのものに夢中になると自然とそこから派生するものも頭のどこかにストックされていき、それが新しい仕事につながっていく」（注259）と指摘する。

とことんハマっていくと新しい展開が拓け、ハマりまくって後からその点をつなぎ合わせて線にする。「興味のあること＝ハマれるもの＝遊び＝仕事」が堀江の方程式だが、ネット時代の今日「グローバルマーケットを狙えばマイナーでも勝てる」（注260）と指摘する。「マイナー&低収入」から「メジャー&高収入」を目指すのがこれまでのパターンだったが、最近「マイナー&高収入」組が増えてきており、これに気がついているのが「地下アイドル」のようである。

（注253）落合陽一「超AI時代の生存戦略 インギュラリティ<2040年代>に備える34のリスト」大和書房、2017年、32頁

（注254）落合陽一前掲書、59頁

（注255）落合陽一前掲書、66～67頁

（注256）落合陽一前掲書、181頁

（注257）堀江貴文「99%の会社はいらぬ」ベストセラーズ、2016年、98頁

（注258）堀江貴文前掲書、105頁

（注259）みうらじゅん「『ない仕事』の作り方」文藝春秋、2015年、60頁

（注260）堀江貴文前掲書、112頁

## 24. 地下アイドルを見習え

現在趣味と仕事を直結させた典型例は「地下アイドル」なのかもしれない。

「職業としての地下アイドル」の著者である姫乃たまは「現在の日本は空前のアイドルブームであり、その人数を把握できない」（注261）と指摘する。

アイドルはかつて憧れの存在だったが、スマホの普及で極めて身近なものになったことがその要因だが、姫乃は地下アイドルのことを「個人の努力があまり通用しない世界で運やチャンスを求めて活動を続けている女の子達」と定義する（注262）。姫乃がそうだったように地下アイドル達の多くはかつていじめに遭い心を病んだ経験を有している（注263）。元来人は「見られる」のがとても苦手であるが、実存心理学者のロロ・メイは「人は主体的な存在なので客体になると『恥』を感じるが、「『見られる』という受け手を自ら『見せる』というスタンスに立ってしまえば主体に変わる」と指摘する（注264）。地下アイドルの舞台は客席と近く文化祭のような高揚感がある（注264）ことが幸いして、地下アイドル達は「見られる」存在から「見せる」存在となって周りの人々を元気にさせる美の輝きを見せている。

地下アイドルは自分の目指す場所に向かっていくことでファンに希望を与えているが、ファンは「認知されたい」という欲求が強いため、地下アイドルにとって「人付き合い」は大事な仕事である（注265）。

地下アイドルのファンについて姫乃は「物事を多角的に捉えることができる柔軟な思考

の持ち主であり、どんな女の子にもすぐに魅力を見いだして楽しむことができる。趣味を共有できる友人の存在が幸福をもたらす」と好意的な印象を持っている（注266）。

「日本の女性アイドルは5000人超、その大半は数千～数万円のレンジの報酬で活動している。日本全国のアイドル市場規模は約2500億円である」（注267）と指摘するのは「ご当地アイドルの経済学」の著者である田中秀臣である。

新潟市のアイドル事情に詳しい田中は「アイドル文化により同県の魅力度ランキングが向上した」（注268）と指摘するが、新潟市で活動するアイドルグループ数は約30である。「人口80万人の新潟市はアイドルを支えるぎりぎりの規模だ」（注269）とする田中だが、中高年中心で発信力が高い地元のファンが主体となってアイドル活動を支援している。小規模な劇場やライブ会場で活動している地下アイドルはファンにとって距離が近く物語を共有しやすいことが魅力であり、アイドルの成長していく姿がファンの喜びとなっている。このためファン達は無償で楽曲を提供したりアイドルと共に新たな市場を開拓しておりまさにファンとアイドルと「共通の成功物語を構築」している（注269）。

地下アイドルにとって「アイドルである」ことは経済的な動機を超える目的であり、人によっては生命と引き換えにする。夢をあきらめずにぎりぎりまで続けることが唯一の成功の法則（注270）だが、周りの人々の想定を超える犠牲の大きさが彼女たちを輝かせているのは言うまでもない。

新潟のライブの観客の年齢層は高く、地下アイドル達が観客一人一人を愛称で呼び気を遣ってケアしている姿を見て田中は「介護士を連想する」としている（注271）。ファンの高齢化に伴い、生命の光は強く輝かせている彼女たちは憧れの対象から癒しの対象へと変わりつつあるようだ。

アイドルとファンとの関係性に注目しているのは「前田敦子はキリストを超えた <宗教>としてのAKB」の著者である濱野智史である。

ファンとつながり合うことでアイドルが「弱者なのに超人であるような存在」になる一方、ファンは偶然劇場で発見して応援するようになったアイドルを支援するために生きているという利他的な存在になる（注272）ことに注目する濱野は「ロングテール型アイドル」をさらに生み出していく必要性を強調する（注273）。

（注261） 姫乃たま「職業としての地下アイドル」朝日新聞出版、2017年、39頁

（注262） 姫乃たま前掲書、217頁

（注263） 姫乃たま前掲書、170頁

（注264） 安田登「能」新潮社、2017年、93頁

（注265） 姫乃たま前掲書、152頁

（注266） 姫乃たま前掲書、147頁

（注267） 田中秀臣「ご当地アイドルの経済学」イースト・プレス、2016年、207頁

（注268） 田中秀臣前掲書、36頁

（注269） 田中秀臣前掲書、53頁

（注270） 田中秀臣前掲書、241頁

（注271） 田中秀臣前掲書、243頁

(注272) 濱野智史「前田敦子はキリストを超えた <宗教>としてのAKB」筑摩書房、2012年、55頁

(注273) 濱野智史前掲書、179頁

## 25. 「かわいい」という美学

姫乃が「戦前にもアイドル的な少女がいた」（注274）としているが興味深い。

「アイドルという言葉は戦前からあった」（注275）と指摘するのは「幻の近代アイドル史：明治・大正・昭和の大衆芸能盛衰記」の著者である笹山敬輔である。

笹山は「若い青年を熱狂させときに恋愛感情を抱かせたというエピソードを持つ少女達」のことをアイドルと定義づけている（注276）が、戦前のアイドルはなんといっても娘義太夫だった。

娘義太夫とは「浄瑠璃（三味線とともに物語を語って聞かせる音楽）を披露する少女達」のことである。初期の義太夫は男性だったが、江戸中期頃から女の演者が登場した。ビートルたけしの祖母は娘義太夫だった。

「かんざしばらり」と全身をふるわせ色気たっぷりの娘義太夫に熱狂するファンは「ドースル連」と呼ばれていたが、ファンは「推しメン」から視線をもらうことを何より喜び、生きるエネルギーをもらっていた（注277）。推しメン達は自主的に投票会を実施してランキング上位の義太夫に賞品を送ったりしていたが、その中には夏目漱石や高浜虚子、志賀直哉も含まれていた（志賀の場合は格別で娘義太夫が小説家になるきっかけとなったという）（注278）。

娘義太夫はゴシップ新聞の格好のターゲットになるなど社会現象にまで発展した（ビートルズが戦後来日した際に娘根義太夫が引き合いに出された）（注279）が、劇場の外ではファン同士の交流が盛んだった（注280）。

「不完全な美というものを喜ぶのが日本人であり、未完成なものだから鑑賞する人の心がそれを美しくしていく」（注281）

こう指摘するのは「日本の美について教えてください」の著者中島誠之助である。

不完全の美は偶然であり、意図してできたものではない。人為の及ばないところで遊ぶ中で生まれるが、「夢中になって無心になって一步を超越するとヘタウマになる」（注282）と中島は指摘する。

日本のヘタウマ文化とは未熟さが逆に魅力となる文化のことを指すが、歌やダンスなどの技術力よりも人間的な魅力のほうが日本では重要視されることが多い。

ヘタウマと類似性が高いのが「かわいい」である。

「かわいい論」の著者である四方田犬彦は「かわいいは21世紀の日本の美学である」（注283）と主張する。「清少納言が現在で言うかわいいの例として挙げているものは、そのささいで遊戯的な身振りに焦点が当てられている」（注284）と指摘する四方田だが、「かわいい」の根底にあるのは心の躍動である（注285）。「かわいい」という言葉には現前する心の躍動に向かって惜しげもなく投げられる身体の身振りの痕跡を伴っており、「『かわいい』に対立する状態は『無感動』である」（注286）と四方田は指摘する。

四方田は「ゆうゆう」という中高年女性向け雑誌に注目しているが、この雑誌は「かわいい」という視点から記事を編集しており、「かわいい」は既には若者文化の枠を超えて広がっているようだ。雑誌に掲載される記事は「成熟と達観のまなざし」「年を重ねてますますかわいい」「日常生活の何気ない状況の中にかわいいを発見」などであり、「生理的な年齢に対する精神の勝利」を謳っている（注287）と言えよう。

「宗教の誕生」の著者である月本昭男は「『かわいい』は文明を特徴付ける理性が情動や身体などによって置き換わる現象の先駆けである」（注288）と主張しているが、「かわいい」現象は「手が届くところに置かれた現在の祝祭」となっているのかもしれない。

日本文化は「場を共有し意味を戯れること」に特徴があり、平安の昔から日常の細部に宿るさまざまな魂のさざめきを活写してきた（注289）が、現在の日本でも美の遍在性の伝統が保たれているようだ。

（注274） 姫乃たま前掲書、47頁

（注275） 笹山敬輔「幻の近代アイドル史：明治・大正・昭和の大衆芸能盛衰記」彩流社、2014年、8頁

（注276） 笹山敬輔前掲書、12頁

（注277） 笹山敬輔前掲書、21～22頁

（注278） 笹山敬輔前掲書、35頁

（注279） 笹山敬輔前掲書、41頁

（注280） 笹山敬輔前掲書、179頁

（注281） 中島誠之助「日本の美について教えてください」祥伝社、2017年、23頁

（注282） 中島誠之助前掲書、213頁

（注283） 四方田犬彦「かわいい論」筑摩書房、2006年、18頁

（注284） 四方田犬彦前掲書、33頁

（注285） 四方田犬彦前掲書、72頁

（注286） 四方田犬彦前掲書、76頁

（注287） 四方田犬彦前掲書、149頁

（注288） 月本昭男「宗教の誕生：宗教の起源・古代の宗教」山川出版社、2017年、31頁

（注289） 「かわいい文化とテクノロジーの隠れた関係」横幹<知の統合>シリーズ編集委員会、東京電機大学出版局、2016年、34～35頁

## 26. オタクの可能性

「オタク性はかつてと違って魅力に転換した」（注290）

このように指摘するのは「新・オタク経済」の著者である原田曜平である。

オタクという言葉は1983年にアイドル評論家の中森明夫が初めて使用したとされているが、今や「一億総オタク時代が到来した」（注291）と原田は主張する。特徴的なのは最近の若者達が「オタク知識をコミュニケーションのネタとして活用している」（注

292) ことである。ニコニコ動画などの動画共有サイトに「歌ってみた」「踊ってみた」といった自分のパフォーマンス動画を投稿する発信型のアクティブなおタクも出現しており、彼らにとってライブ参加、コスプレ、SNSを通じた同好の士との語らいを通じておタクキャラとして毎日を過ごすことが楽しいのである(注293)。

おタクに限らず現在の若者気質はモノ所有よりも体験型消費に変わりつつある。モノの所有に固執せず体験や発信で自らのおタク性を表現するのが主流になってきている。おタク同士のオフ会としてコミックマーケット(コミケ)の場を利用するケースも増えている(注294)。時代は自己実現欲求の段階に突入しているのである。

原田によれば現在日本のおタク市場は約3兆円である。おタク一人当たりの消費金額は減少しているが、日本人の2割がおタクと認識する時代となっており、おタク市場は全体として拡大している(注295)という。

「鈴木さんにも分かるネットの未来」の著者である川上量生は「日本のネット上での創作活動は世界の中でも特筆すべきレベルにある」(注296)と指摘する。「日本には豊かなニートが多く、彼らが有する能力をビジネスとして海外でも競争力を持つような文化に育てていきたい」(注297)と抱負を語っている。

日本のコミケは世界最大の同人誌即売会である。1975年に第1回が開催され、現在では夏・冬と年2回東京ビックサイトで行われている。3日間の開催に50万人以上のおタク達が参加するが、作り手と受け取り手の距離が近いのが特徴である(注298)。

「根性を武器にして闘う個人を支援し、仕事に就かない暇な人たちが世界の文明をつくる」(注299)ことを理想とする川上は、おタク達が活動しやすくするための権利の整備(著作権の2次利用の容易化など)やニコファーレなどの活躍の舞台を提供することで「既存の商業的仕組みがないところでお金がある程度回る」仕組みの構築を目指している(注300)。

「<インターネット>の次に来るもの 未来を決める12の法則」の著者であるケヴィン・ケリーはインターネット時代に入り①物は事になり②所有でなく利用が主流となる③資源を配分することが仕事になる④音楽や映画、物語など最近まで記録した物として販売されてきた芸術は事に戻り、芸術家の収入源は実演になった(注301)と指摘する。

(注290) 原田曜平「新・おタク経済 3兆円市場の地殻大変動」朝日新聞出版、2015年、22頁

(注291) 原田曜平前掲書、32頁

(注292) 原田曜平前掲書、52頁

(注293) 原田曜平前掲書、108頁

(注294) 原田曜平前掲書、59頁

(注295) 原田曜平前掲書、8頁

(注296) 川上量生「鈴木さんにも分かるネットの未来」岩波書店、2015年、25頁

(注297) 川上量生前掲書、

(注298) 村上隆「創造力なき日本 アートの現場で甦る『覚悟』と『継続』」角川書店、2012年、184頁

(注299) 村上隆前掲書、214頁

(注300) 村上隆前掲書、201頁

(注302) ケヴィン・ケリー 「＜インターネット＞の次に来るもの 未来を決める12の法則」NHK出版、2016年、

## 27. お金2. 0

原田は「アニメ作品やファン向けグッズ、マイナー作品のDVD化のためにクラウドファンディングが利用され始めている」（注303）と指摘するが、十分な規模での資金が確保できているわけではない。支援のツールの多様化は進んだが、まだまだそれをすくう網が粗いからである。社会に居場所がないお金をそれを必要とする人のもとに循環させるプラットフォームの構築が喫緊の課題である。

「なめらかなお金がめぐる社会」の著者である家入一真は「表現者はあふれているが、鑑賞者は不足している」現状にかんがみ、表現者を尊重し気前よくお金を払ってくれるような消費者や舞台を増やすことを目指している（注304）。表現活動を続けられるような仕組みとして家入が有望視しているのはクラウドファンディングである。

ネット時代の消費者はコピーできるものにお金を払わなくなったことから、家入は「アーティストを直接応援する」ことに主眼を置いている（注305）。

お金や効率性とは関係なくつながることができる受け皿としてネットがその役割を果たし始めた時代である。日本では恵まれない子供や難民への支援などへの寄付文化が低調だったが、クラウドファンディングは順調に成長している。家入によれば「日本のクラウドファンディングは資金の出し手ともらい手の間のトラブルが少ない」（注306）という。

家入がクラウドファンディングに注目しているのは小さな経済圏を作るためでもある。「小さなコミュニティを作るのが得意だった日本人は小さな経済圏を作って居場所を確保すべきだ」（注307）と主張する家入の目標は「5万円のプロジェクトを1000個つくる」ことである（注308）。資金の出し手が一つ一つのプロジェクトに付随する体験やストーリーに惹かれパトロンとなり、自分の内的欲求を満たすために活動するクリエイターや起業家、アーティストなどの個人が小さな経済圏をつくって小さく稼ぎながら生きていけたらどんなによいことだろうか。

現在ビットコインを始め仮想通貨がブームとなっており、ブロックチェーンという技術を活用した新しい仕組み作りが始まっている。

「人間の脳は経験や学習によって快楽物資を分泌できる対象を自由に変化させることができる」（注309）

こう主張するのは「お金 新しい経済のルールと生き方」の著者である佐藤航陽だが、「インターネット上で歌や芸を披露する者に対して面白いと思ったら有料のアイテムを購入してその人に『投げ銭』を送るという行為が活発化している（これが盛んな中国のライブ配信の2016年の市場規模は5000億円超）」（注310）と指摘する。

「現在起きていることはあらゆる仕組みの分散化だ」（注311）とする佐藤は今後は「独自に価値を発揮する経済システムそのものをつくることのできる存在が大きな力を持つ」（注312）と主張する。ブロックチェーン上で機能する独自の経済圏は「トークン」

と呼ばれている（注313）が、現在のお金では可視化できない曖昧な概念も「トークンを活用すれば好きに紐づけて流通させること」（注314）が出来ると佐藤は主張する。佐藤が想定している価値は「個人の内面的にとってポジティブな効果を及ぼす」ものや「社会全体の持続性を高めるような活動」（注315）である。「不完全燃焼のような感覚が多くの人を不幸にしている」現状で「動画配信の中で本当に楽しそうに熱中してやっている場合には人気が出ている」（注316）と指摘する佐藤は「他者の心にできたサビを吹き飛ばすことができる熱量（情熱）を持って取り組めることを探すことが大事である」（注317）と力説する。

トークンエコノミーの出現で「お金は価値を媒介する1つの選択肢に過ぎなくなった」（注318）とする佐藤だが、彼が指摘する価値は美がもたらす価値の同等であると言っても過言ではない。

イギリスの作家がかつて「人間は自分が生まれたときに既に存在しているテクノロジーを自然な世界の一部と感じる」（注319）と指摘したが、これからの若者にとってトークンエコノミーが築く美意識社会が当たり前になるかもしれない。

貨幣システム全体が大変革の時代を迎えつつある現下の情勢は、美意識を中心とする新たな社会をつくる好機と言えるのではないだろうか。

（注303）原田曜平前掲書、218頁

（注304）家入一真「さよならインターネット まもなく消えるその「輪郭」について」中央公論新社、2016年、135頁

（注305）家入一真前掲書、168頁

（注306）家入一真「なめらかなお金がめぐる社会。あるいは、なぜあなたは小さな経済圏で生きるべきなのか、ということ」デイスカヴァー・ツウエンティワン、2017年、143頁

（注307）家入一真前掲書、197頁

（注308）家入一真前掲書、136頁

（注309）佐藤航陽「お金 新しい経済のルールと生き方」幻冬舎、2017年、83頁

（注310）佐藤航陽前掲書、122頁

（注311）佐藤航陽前掲書、112頁

（注312）佐藤航陽前掲書、114頁

（注313）佐藤航陽前掲書、124頁

（注314）佐藤航陽前掲書、129頁

（注315）佐藤航陽前掲書、167頁

（注316）佐藤航陽前掲書、222頁

（注317）佐藤航陽前掲書、224頁

（注318）佐藤航陽前掲書、165頁

（注319）佐藤航陽前掲書、207頁

## 28. 求む！旦那精神

このような若者の動きに高齢者は黙っていてよいのだろうか。

対象への利害関心のなさが美の重要な要素だとすれば、日常生活のかなたにある「死」との接点が大きくなる。日本は既に多死社会に突入しており（毎年100万人以上が死亡、出生数を上回る）、基本的な欲求が実用的な価値ではなく美的な価値が大きく前面に出てきてもおかしくない。機能や効率を超えた美を持ち込めば生活に潤いが出てくるのは自然の流れであり、美を体験した後の人生に良い影響を及ぼすだろう。

「脳は美をどう感じるか」の著者である川畑秀明は「2009年に開かれた世界中の美術展覧会で一日当たりの平均来場者のトップ4を日本の展覧会が独占したように、日本では美術館の人気は根強い」（注320）と指摘する。だが美を求めるという行為の意味が人と人とがつながることであるとすれば、芸術作品を鑑賞するだけでその欲求は満たされているとは思えない。

「『芸術力』の磨き方」の著者である林望は「人間にはやむにやまれず心の内奥から湧き上がってくる『表現』への欲求というものがある」とした上で「他人の作ったものを鑑賞するだけでは私たちの『芸術欲』を満たすことはできない」（注321）と主張する。

「仕事は人生に必須のものではないが、遊び（アート）は絶対欠かせない」とする林は、アートが過剰な職業分化を遂げてしまったがために「もともとはコミュニティのなかで人と人をつなぐメディアとして機能していたものがその役割を果たさなくなってしまった」と嘆く（注322）。この現状を打開するために林は一般の人々が「芸術鑑賞に費やしているお金や時間と労力の一部を自ら表現するための技術習得に回す」とともに、アーティスト側も「自分の持っている技術を世のため人のために広める」努力をすべきだ（注323）と強調している。

美の探求に努める高齢者には「旦那（『布施』を意味する梵語に起源を持つ）」という役割もある。

「『旦那』と遊びと日本文化 達人に学ぶ粋な生き方」の著者である岩淵潤子は「戦後自信喪失に陥った日本人は『旦那』精神も忘れてしまった」（注324）と指摘する。

戦前の日本で「旦那」精神を発揮していたのは各地の造り酒屋だったが、戦後の農地解放によりそれまで小作農に頼っていた原材料の仕入れコストが急騰したため「旦那」は激減してしまった（注325）ようだ。だが戦後も「旦那」精神を続けている造り酒屋のトップが「美しいものに惹かれ一流の芸術工芸品を蒐集するといったことと同様の感覚で、社会にとって必要だと感じ寄付や支援活動に取り組んでいる」と述べているのは印象深い（注326）。

明治期の文人の会だった「竹馬会」「根岸党」などは趣味人のための知と人脈のネットワークが広がっていたが、江戸時代の庶民の「旦那」ぶりは半端でなかった。

「江戸時代の日本の庶民はモノを大切に使いこなす一方で人間関係には豪勢な散在を競い合った」（注327）

このように指摘しているのは「お江戸日本は世界最高のワンダーランド」の著者増田悦佐である。「閉塞感の出てきた時代にどう経済を盛り上げるかについて江戸の庶民はうまい方法を思いつき実践していた」（注328）とする増田だが、モノを大事に使い回していた江戸の庶民たちは大道芸人にはずいぶん気前よく投げ銭をはずみ、芸事を習い、歌舞

伎や寄席に繰り出すなど派手に散財していた（注329）。普段はあくまでもつつましく張り込み時には張り込んでというメリハリが、江戸庶民のカネもモノも残せないが豪勢な気分でいられる生活を支えていたようだ。既に述べたように日常生活だけでは人間は窒息し社会は活力を失うためたまったエントロピーを外に捨てる回路が不可欠である。生命の維持に必要な量を超えるエネルギーを受け取っているヒトは散財することは快楽である。江戸時代の庶民は「人として生きることの実感を欠く社会は意味がない」ということを理解していたのである。江戸時代から庶民の間に芸事や習い事が普及していた日本の伝統にかんがみ、高齢化が進む時代に備えて「お互いにいくつかの芸事を教え合い、習い合う世の中になれば、『死に金』として滞留している貯蓄もかなり流動化する」と指摘する増田は「一億総お師匠さん社会をつくろう」と提唱している（注330）。

汎用AIの導入で仕事がより一層簡単になりモノの価格が下がり続ければ、現在は遊びでしかない活動でも生活できるようになるかもしれない。将来の日本は現実の衣食住よりも快感を求めるような社会になる可能性があるが、江戸庶民のライフスタイルは大いに参考になるのではないだろうか。

現在の日本で「旦那」精神を復活させるために「社会全体の旦那レベルの底上げが必要」（注331）とする岩渕が注目しているのはタカラヅカファンである。

（注320）川畑秀明「脳は美をどう感じるか アートの脳科学」筑摩書房、2012年、56頁

（注321）林望「『芸術力』の磨き方」PHP出版、2003年、23頁

（注322）林望前掲書、31頁

（注323）林望前掲書、36頁

（注324）岩渕潤子「『旦那』と遊びと日本文化 達人に学ぶ粋な生き方」PHP出版、1996年、229頁

（注325）岩渕潤子前掲書、87頁

（注326）岩渕潤子前掲書、92頁

（注327）増田悦佐「お江戸日本は世界最高のワンダーランド」講談社、2013年、5頁

（注328）増田悦佐前掲書、157頁

（注329）増田悦佐前掲書、152頁

（注330）増田悦佐前掲書、177頁

（注331）岩渕潤子前掲書、224頁

## 29. 朗らかに清く正しく美しく

戦前の旦那のように作り手の関係性を保ち、江戸庶民に散財をする存在としてタカラヅカファン。

「旦那として文化や芸術を支援するのも個性の発露である」とする岩渕は、タカラヅカファン（観客）がタカラジェンヌ（演じ手）と目的を共有している姿にかつての旦那マインドを彷彿とさせている（注332）。

阪急鉄道の創業者である小林一三が歌舞伎に代わる国民劇として立ち上げた宝塚歌劇団は2014年に創立100周年を迎えた。2016年の観客動員数は約270万人である。宝塚大劇場（2550席）と東京宝塚劇場（2069席）はほぼ毎日公演が行われ、客席稼働率はほぼ100%である。

「鉄道会社がつくった「タカラヅカ」という奇跡」の著者である中本千晶によれば、コアのタカラヅカファンは2割強であり、40～50代がボリュームゾーンである（注333）。「オタクの地位が向上に伴いカミングアウトをするタカラヅカファンが増加した」（注334）とする中本だが、彼女らにとってのタカラヅカの一番の魅力は「舞台上のタカラジェンヌの真摯な姿にチャージされて観ると必ず元気になれるところ」（注335）である。人生に対して真面目に向き合う姿勢や純粋さを持ち合わせたタカラジェンヌは「所詮努力などしても無駄」と斜に構えるのが主流の世の中において希有の存在である（注336）。青春の楽しみを犠牲にして必死に頑張っている姿に感動しがんばっているその姿に惚れるファンは1日の1割をタカラヅカ関連に割き、年間で100万円近い金額を費やしている（注337）ようだが、タカラヅカは消費の対象ではなく「わがこと」である（注338）。彼女たちは仕事場の先輩よりパワーを感じるタカラジェンヌの方に帰属意識を持っている（注339）。

タカラヅカファンはモットーである「朗らかに清く正しく美しく」に従い、日常生活で人が見ていなくても社会のルールやマナーを守る努力をしている（注340）という。

「人としてのエネルギー値が高く、ファンだと聞けばみんな友だちとなり、多様性を認め合っている（注341）」タカラヅカファンは将来の日本人の模範を示していると言ったら言い過ぎだろうか。

（注332）岩渕潤子前掲書、227頁

（注333）岩渕潤子前掲書、161頁

（注334）中本千晶「鉄道会社がつくった「タカラヅカ」という奇跡」ポプラ社、2017年、154頁

（注335）中本千晶前掲書、155頁

（注336）中本千晶前掲書、185頁

（注337）中本千晶前掲書、184頁

（注338）中本千晶「ヅカファン道」東京堂出版、2012年、92頁

（注339）中本千晶前掲書、23頁

（注340）中本千晶「鉄道会社がつくった「タカラヅカ」という奇跡」210頁

（注341）中本千晶「ヅカファン道」174頁

### 30. コミュニティ・アート振興にヘリコプターマネー（地域通貨）を活用

19世紀後半の英国のウィリアム・モリスの工芸運動が生産者と消費者の関係に近くなるような市場環境の整備に努めていたことに注目する白川は「コミュニティ・アート」を提唱している（注342）。

筆者は市場機能を生かした美的創造活動の拡大を基本としつつも、前述のコミケを参考

にして全国各地にコミュニティ・アート組合を創設することを提案する。当初は供給過剰が予想されるため地方自治体がクーポン（地域通貨）を先行発行する必要があるだろう。

参考になるのはポール・クルーグマンがたびたび引用している「ベビーシッター協同組合の危機への処方箋」であるが、「ベビーシッター組合」とは次のような試みだった（注343）。

1970年代ワシントンDCで専門的な職業に就く子持ちの若い共働きのカップルが、互いの子供を世話し合うというベビーシッター協同組合を設立した。この組合では1時間のベビーシッターを保証するクーポン（紙幣）を発行してベビーシッターが行われる度にクーポンを譲り渡されるし合うという仕組みを構築し、負担が公平になされるように配慮された。しかしこの仕組みには問題があった。自分たちが「いつベビーシッターを必要とするか」正確には予想がつかないため、どの夫婦も「クーポンを貯めておきたい」としたことからクーポンの流通量全体が減少してしまったのである。そうすると各カップルはますますクーポンを貯めようとしたため、クーポンの流通量はさらに減少し、組合活動が機能不全に陥ってしまった。試行錯誤の末、組合自体がクーポンを発行して各カップルに配布してクーポンの流通量を増加させた結果、外出するカップルが増え、ベビーシッターの機会が増加し、これによりさらに各カップルの外出意欲が刺激されるという好循環が生まれた。最初にクーポンを発行することで潜在需要を創出することにより、需給ギャップが解消された訳である。

ベビーシッター組合の教訓から、コミュニティ・アートを振興するため当初地方自治体がクーポンを発行すればよいのではないかと考えている。

汎用AI時代の到来で大量の技術的失業者が発生することを懸念する井上は「ヘリコプターマネー（公的機関が空からヘリコプターでお金を降らせるように貨幣を市中に供給すること）、以下「ヘリマネ」）政策を採用し供給の拡大に見合う需要を拡大させる必要性を強調しているが、「地方自治体がヘリマネ方式でクーポンを配布する」というのが筆者の考えである。

前述のベビーシッター組合には後日談がある。クーポンの供給を増加しすぎたためにインフレが生じてしまい組合が閉鎖に追い込まれてしまったのである。

井上も「インフレが生じないようにヘリコプターマネーを配布すべき」（注344）としているが、日本全国を対象とし財・サービスを限定しない形での運用は思いがけない形で副作用が出てくる可能性が少なくないだろう。

筆者が考える案であれば、地方自治体単位でコミュニティ・アートというカテゴリーに絞る形でヘリコプターマネーを配布することになるので副作用は生じにくい。ヘリコプターマネーを地方自治体が配布するという政策的根拠はコミュニティ・アートを通して地域社会の生活環境が改善されるという外部経済性（社会的効用）である。

数多くの人がお互いにマイクロサービスを行う経済は現時点ではかなり非効率で価値が低いかもしれないが、情報技術などのさらなる進歩により今後この状態は改善される可能性がある。メイスンは、ポスト資本主義をデザインするにあたって「どこで外部性が生まれ、分配されるのかに重点を置かなければならない」としているが、これまで注目されてこなかった「遍在する美」の外部性を軸に新たな仕組みを作っていくことは合理的だと思うがどうだろうか。

筆者が地域通貨に着目するのは、近代以前の社会では限定目的の貨幣が流通しているのは当たり前であり、限定目的の貨幣を共に用いるということは同じ共同幻想を持つ証となりそれゆえに困ったときには他の共同体の一員から財物やサービスの分配にあずかれたという歴史的事実に基づいている。

貨幣の「弊（けがれを払うため神前に供える布・紙）」の漢字が示すとおり、貨幣はもともと呪術的で神聖な意味を帯びていたがゆえに他のモノを購入するという独特の購買力を持ち得たのであろう。

「貨幣という謎」の著者である西部忠も「貨幣は観念の自己実現である」（注344）と指摘するように、貨幣のあり方を変えることで新しい市場が生まれるだろう。

（注342）白川昌生「美術、市場、地域通貨をめぐって」、186頁

（注343）井上智洋「ヘリコプターマネー」日本経済新聞出版、2016年、32頁

（注344）井上智洋前掲書、124頁

（注345）西部忠「貨幣という謎 金（きん）と日銀券とビットコイン」NHK出版、2014年、104頁

### 31. 知識社会から美意識社会へ

「土地」「労働」「資本」という従来の生産要素よりも「情報」が重要になると洞察したドラッカーは1969年に「断絶の時代」を上梓し、「知識社会への転換が1965年頃に始まり2025年頃まで続く」と予言した（注346）。

ドラッカーが言う知識社会とは、かつてアカデミックなものとされていた知識の性格が変わり、これらを有機的に連携させることにより経済的な成果が生まれる社会のことである（注347）。その中であって知識と技能の相乗効果を生み出すテクノロジストが中心的な役割（人的資本）を果たす（注348）としていた。

しかしドラッカーは知識社会が実現した2002年に上梓した「ネクスト・ソサエティ」の中で「テクノロジストは40～50代で燃え尽きるため、その後のために非競争的な生活を準備すべきである。これまでは経済が主役だったが、これからの20～30年は少子高齢化により社会が主役になる」として知識社会の限界を読み取り、情報資本主義は新たな社会へ移行する過程にあるものと捉えていた（注349）。

筆者は今後の社会では「知識」に代わって「美」が資本となると考えているが、知識が社会に受け入れられるにつれその性格を変化させていった。

戦前柳宗悦は「芸術という概念が工芸から完全に切り離されて成り立ったのは19世紀後半の欧州だった。美しいのは特別なことではない。生活の中から生み出されたものはそれ自体で固有の美しさを持っている」と主張して民藝運動（美学を通しての社会変革）を展開した（注350）が、汎用AI時代の到来に備えて「美意識革命」を展開する時期に来ているのではないだろうか。

筆者が考える美意識社会実現のためには「美」のあり方は以下のとおりである。

- ①個別作品（モノ）よりも人々の行動（コト）の中に美を見出す
- ②美の効用は身体動作を通じた生命エネルギーの活性化である

- ③美で社会を活性化するためには日々の精進が欠かせない。
- ④美の創造は天賦の才よりも日々の精進が決め手となる（美的創造の平等性）
- ⑤「自らの生理的な『快』を求めながら他者への配慮をする」という日本本来の美意識（身体感覚に敏感）を重視する
- ⑥動的な美（特に歌と踊り）が有する社会秩序形成機能を活用する
- ⑦美意識は有効な資源であるとの発想に立ち、潜在的に市場性を有する美の活動を拡大させる方策を講じる（特に美的活動に目覚め始めた若者の動きを支援する）

伊藤元重はかねてから「機械に置き換わってしまうようなワークではなく、人間にしかできないような質の高いプレーヤーとしての仕事が増えていくようにすべき」（注351）と主張している。伊藤が想定しているプレーヤーとしての仕事は「新素材や機械の開発、グローバル化など」だが、プレーヤーの意味には「競技者」や「演奏者」、「役者」という意味がある。

あらゆる組織・集団の高齢化が日本社会に閉塞感をもたらしているが、不自由で不愉快な職場が若者達に自己の実存に目覚めようとする衝動に火を点したようである。

本文では地下アイドルについて触れたが、ユーチューバーも注目すべき存在である。

ソニー生命保険が2017年4月25日に実施したアンケート（全国から200サンプル）によれば男子中学生が将来なりたい職業の第3位に「ユーチューバーなど動画投稿者（17%）」がランクインしている（注352）。

ユーチューバー達は自分で面白い企画（創作料理やメイク術など）を考えては映像作品としてユーチューバー上に発信、どんどんファンを獲得し視聴者数をマネタイズして生活しているが、2016年3月に活動を開始したカリスマ・ユーチューバーであるヒカル（フォロワー数は約250万人、年収は約5億）は「埋もれるよりも嫌われる方がまし、日本一の個人になりたい、自分で発信できる場を持たない芸能人は力がなくなっている」と述べているのが印象深い（2017年9月に活動を無期限停止した）（注353）。

2017年の流行語大賞は「インスタ映え」だった。「写真・動画共有SNS『Instagram』に写真を投稿した際に見映えがする」という意味だが、かつては「特別なイベントの記録」だった写真や動画は今や「感情や状況を人と共有するコミュニケーションの道具」となりつつある（注354）。「日常の中の見過ごされがちな楽しさや美しさをすくい取る」という繊細な感性と想像力の持ち主がインスタ映えの現象を先導した（注355）が、その動きが急速に拡大し、かつてアンディ・ウォーホールが述べた「誰でも15分間は有名になれる時代」が現実化した（注356）のである。

インターネットを主要媒体とする美の活動（インターネットアート）も盛んになっているが、その特徴は対話的であり参加型であるということである。

バーチャルリアリティ（コンピュータのつくり出した映像空間の中に入り込んでそこでいろいろな体験ができる技術）も長足の進歩を遂げている。日本バーチャルリアリティ学会は2013年今後のロードマップを策定し、その中で「2040年頃には誰もがそれぞれの個性や長所を生かしてお互いにつながりあい、分かち合いながら生き生きと生産的・創造的活動を実施していける「ロングテール型超参与社会」が実現していく」ことを提唱している（注357）。「⑧情報技術の進歩が美の活動に与える影響に注目する」ことも美に関する重要な論点になっていくだろう。

ケインズは1930年に「100年後の人間は高潔で上手な一日の過ごし方を教示する人を尊敬するようになる」（注358）と汎用AI時代到来を見越したかのような「予言」を行ったが、この予言は現実的な予測に変わりつつある。

AIが過去の大量のデータさえあれば統計処理により大衆が好みそうな絵やポピュラー音楽などをつくりだせるようになってきているが、AIは新たな美の創造の分野を開拓することはできない。環境の変化に柔軟に対応しつつ身体を通した人間同士の化学反応こそがニューフロンティア開拓のドライビングフォースだからである。

アダムスミスが「国富論」の中で「国や社会が貧困から開放されるためには、人々が自分の適性に合わせて社会的分業に参加できる仕組みを持つことが必要」と主張しているが、どれくらい多様な職種があるかが今後の豊かさを規定することになるだろう（注359）

「『物語』が失われた現在、お笑い芸人の自伝本がほぼ唯一の生き方のお手本になっている」（注360）との指摘があるが、江戸時代の庶民のように一般の人々こそがこの世界を面白くする主人公である。私たちが人生を楽しむために江戸の庶民の美意識を取り戻せば、汎用AI時代は「大量失業」という恐怖ではなく、「人間性の復活」のための福音となるのではないだろうか。

ヘリコプターマネーの活用とともに美意識社会の実現に大きく貢献するだろう。

「サピエンス全史」の著者であるユヴァル・ノア・ハラリの主張（「虚構（言語によって作られる想像上の現実）、イデオロギー」）を作ることによって膨大な数の見知らぬ人どうしが首尾良く協力できるという能力を獲得することで人類は繁栄したが、虚構が変われば人間は10～20年のうちにその行動を変えることができるようになる」（注361）と主張する。ハラリの主張が正しければ、「知識が重要」という虚構が「美が重要」という意識革命が起きれば、社会は驚くほどの速さで変化するのではないだろうか。

（注346）ピーター・ドラッカー「断絶の時代 来たるべき地域社会の構想」ダイヤモンド社、1969年、356頁

（注347）ピーター・ドラッカー前掲書、4頁

（注348）ピーター・ドラッカー前掲書、205頁

（注349）ピーター・ドラッカー「ネクスト・ソサエティ」ダイヤモンド社、2002年、29頁

（注350）橋本治前掲書、97頁

（注351）経済産業ジャーナル2012年8・9月号、2頁

（注352）2017年4月25日付ソニー生命保険株式会社ニュースリリース、1頁

（注353）2017年9月11日付日経ビジネスオンライン

（注354）天野彬「シェアしたがる心理 SNSの情報環境を読み解く7つの視点」株式会社宣伝会議、2017年22頁

（注355）天野彬前掲書、60～61頁

（注356）天野彬前掲書、356頁

（注357）稲見昌彦「スーパーヒューマン誕生！人間はSFを超える」NHK出版、2016年、227頁

（注358）ジョン・メイナード・ケインズ「孫たちの経済的可能性」1930年

- (注359) 井上義朗「新しい働き方の経済学：アダム・スミス「国富論」を読み直す」  
現代書館、2017年、67頁
- (注360) R o o t p o r t 「失敗すれば即終了！日本の若者がとるべき生存戦略」晶  
文社、2016年、8頁
- (注361) ユヴァル・ノア・ハラリ「サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福」河出  
書房新社、2016年、24頁

## おわりに

ピータータスカは汎用AI時代が到来した「2050年の日本は、100歳を超える多くの高齢クリエイターとその創作活動を支えるたくさんの老荘オタクが創り出す文化が開く社会となる」と予言する(注362)が、その内容は「必然的未来」ではないものの、「それが起こることはあり得ないとされていても人間が働きかければ起こりうる」という偶然的未来(ドイツの哲学者ライプニッツ)である。

最近の科学的知見により日本人は苦境に陥るとつになりやすいが、逆に幸せな環境に出会うと人一倍楽観的になれることが明らかになっている(注363)。美意識を基点として新たなソーシャルデザインを構築すれば、将来の日本にも希望が持てるようになるのではないだろうか。

コンピュータ技術全般に疎い筆者が無謀な挑戦を決断させたのは、攻殻機動隊(1995年公開)で現在の電腦社会の実現を予言した押井守の「想像力さえあれば、スマホやネットをやっていないくても近未来のネット社会を描くことができる」(注364)という指摘である。「『わか者、ばか者、よそ者』はいちばん役に立つ AI時代の創造的思考」の著者である木村尚義の「ロジカルシンキングを得意とするAIと共存するためには直感やひらめきも含めたイメージをも駆使して思考することが大事である」(注365)との指摘にも大い勇気づけられた。

最後にロジカルシンキングとは真逆の存在である本拙稿がAIに審査されないことを願うばかりである。

- (注362) 2017年8月22日付ニューズウィーク
- (注363) 橘玲「幸福の『資本』論」ダイヤモンド社、2017年、363頁
- (注364) 押井守「ひとまず、信じない 情報氾濫時代の生き方」中央公論新社、2017年、109頁
- (注365) 木村尚義「『わか者、ばか者、よそ者』はいちばん役に立つ AI時代の創造的思考」創英社、2017年、35頁